山梨県立甲府西高等学校

創立120周年記念誌

The 120th anniversary memories

称(たた)えなん
永久(とこしえ)かけて

称(たた)えなん 永久(とこしえ)かけて

山梨県立甲府西高等学校

創立120周年記念誌

The 120th anniversary memories

山梨県立甲府西高等学校 校長
高見澤 圭一

あいさつ

創立120周年記念誌が多くの皆様のご協力のもと、こうして発刊できることを大変喜びに感じております。

本記念誌では、大正7年に本校の前身である山梨県立高等女学校を卒業後、医師として主にハンセン病の治療に従事された小川正子氏の紹介をはじめ、幅広い年代の同窓生に高校時代の思い出や西高への思いを語っていただいた座談会の様子、卒業後にそれぞれの立場で活躍してきておられる同窓生の寄稿などを中心に編集しております。本誌を手に、120年の歴史の中での、皆様の西高への思いを新たにしていただきたいと思います。

さて、現在は、少子化に伴う人口減少社会への対応、人工知能の進展をはじめとする高度情報社会への対応、「地球沸騰化」と表現されるに至った地球環境問題への対応など、定まった正解のない課題への取り組みが、身近な生活の様々な場面で求められる時代となっています。

教育界においても、新学習指導要領のもとで令和の日本型学校教育の構築への取り組みが行われており、国において「急激に変化する時代の中で育むべき資質・能力として、一人ひとりの生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが必要」と示されています。このことは教育の普遍的な役割であるとはいえ、本校が120年を越える長い歴史の中で絶え間なく積み上げてきた姿と重なるものであります。

本校ではこの10年間の中で、マイクロソフト社との連携によるICT教育の推進にいち早く取り組み、新型コロナウイルス感染症に対応した学びにもスムーズに移行することができました。また、平成31年4月に国際バカロレア校として認定を受け、高次の探究過程での課題解決力や国際的視野等の育成に取り組んでいます。これに併せ、全校生徒が課題研究論文に取り組むなど課題探究にも力を入れています。

こうした中、このたび、120周年記念事業として書道室等特別教室へのエアコン設置、学習スペースの整備など学習環境を改善していただき、学校としての取組みや生徒の学びの充実に大いに役立っております。この場をお借りして改めて、感謝申し上げます。

これからも本校は、輝かしい歴史と伝統を受け継ぎながら、甲府西高校で学ぶ生徒たちが次代を担う力を身に付け社会で活躍できるよう育んで参ります。

終わりに、本記念誌の発刊にあたり、ご尽力ご協力いただきました関係者の皆様に深く感謝申し上げ、ご挨拶とさせていただきます。

山梨県立甲府西高等学校 同窓会長
石原 敬彦

自由で伸び伸びとした校風　そして 品格

私が入学したのは、昭和五〇年四月、甲府二高が新たに総合選抜校となった年でした。二高で入学し、西高で卒業いたしました。

二年生の六月に生徒会長となり、最初の仕事が九月の鳳凰祭でした。「本当にやりたい事ができる学園祭」というコンセプトを掲げ、「一番やりたいことは何か」全校生徒にアンケートを実施しました。圧倒的多数を占めた要望は、それまでにはなかった「模擬店」でした。早速、生徒会顧問の内海潔先生のところにお願いに行きました。先生方にとっては、唐突で短絡的な要請であったと思います。すぐに許可はいただけませんでした。企画には飲食を伴う模擬店も複数あったため、許可をいただくために職員室に何度も通いながら、実現は難しいとも思ったりしました。しかし、ある日、突然許可はおりました。「あとは君たちに任せる。しっかり頼む」それがその時の内海先生の言葉でした。

三年生の六月、土曜日の午後に体育館を借りて軽音楽同好会の仲間たちとフォークロックのコンサートを行った時のことです。出演希望者が増えて終了時間が、申請した時間よりも三時間もオーバーしてしまいました。私は責任者でした。終わった時、職員室で一人、待っていて下さったのも内海先生でした。先生は、体育館まで来てくださり、一緒に最後の施錠をしてくださいました。説諭されることを予想していましたが、一言だけ、「石原、時にはクールになることも必要だ」とおっしゃいました。先生の茨城弁の温かいアクセントと手に下げていらっしゃった風呂敷包み、それに暗くなり始めた空の色を今でも覚えています。

あの頃、母校西高の先生方は私たちをたくさんの場面で「信じて任せて」くださいました。そして、時に心配な状況になっても、待ってくださり、最後まで温かく見守ってくださいました。西高は「自由で伸び伸びとした校風」と言われますが、その根底には女学校時代からの先生方の生徒への強い信頼があるのだと思っています。

そして、先生方は、勉強面では大変厳しい「師」でもありました。宿題はたくさん出ました。朝のホームルームの前に一時間、帰りのホームルームの後にも一時間、課外と呼ばれる授業がありました。夏休みには八ヶ岳の寮に宿泊する林間学校があり、楽しいことを期待して参加すると、実際には、日中は六時間授業を受けて、その後は自主学習、結局一日中勉強するという合宿でした。個人の指導も手厚かったです。数学の山本克英先生は、「朝七時には学校に来ているから質問に来なさい」とおっしゃって早朝の職員室でいつも待っていてくださいました。私は身延線の早い電車で通学していたので、何度も質問に行きました。また、英語の道に進みたいと思いながら、成績が伸び悩んでいた私に、声をかけてくださり、英語の勉強方法を教え、一カ月にわたって毎日個人指導をしてくださったのは加藤正明先生でした。授業の中で予習をしていなかった私を指名し、「石原が予習なしでやっていける実力があるとは思えない」と厳しく叱ってくださったのも加藤先生でした。おかげで私は、英文科に進み、中学校の英語教師になることができました。

縁あって、卒業と同時に同窓会の理事となり、以来今日まで同窓会に関わらせていただいてきましたが、その中で先輩方との数々の素晴らしい出会いに恵まれました。同窓会の先輩方からはとにかく「品格」を感じてきました。そして、この「品格」は、実はお世話になった先生方からも同様に感じていたものであり、西高という学校の大きな魅力ではないかと感じるようになりました。

甲府西高は、百二十年という歴史の中でその創立から幾多の変遷を重ねながら、たゆまぬ進化と発展を続けて来た学校と言えます。そこには常に時代を先取りする叡智がありました。しかし、その叡智の具現化には、関わる人々の個々の人間性と相互の関係性が不可欠です。それまでにはない、新しい何かが提案された時、先に進んでいくためには、提案した人への信頼が必要であり、また初めからすべてがうまくいかなくても寛容に柔軟に受け止め、協力や支援を惜しみなく続けていく決意も必要になります。そこからは、「信じる気持ち」とか「見守るやさしさ・あたたかさ」といったものが生まれます。叡智と常に変化を受け入れる寛容で柔軟な精神、そして、関わり合う人々の相互の信頼が、これまでの西高を築いてきたのではないでしょうか。そして「品格」はその中で醸成されてきたのだと思います。

私が生徒会長になり、革命家を気取って生意気だった時も、前会長の飯島敬子先輩は本当にやさしく接してくださいました。礼節を欠いていた、私を認め、志した変革を後押ししてくださいました。先生方も同様でした。また当時の同窓会長の鈴木勢津子先生は、顧問さんになられた後も理事会では必ず若い私のところに来てくださり「あなた、よろしくたのみますよ」とお声をかけてくださいました。今こうして振り返ってみますと、私は母校西高で、高い教養と確固とした信念を持ちながら、同時に寛容で優しく、温かいたくさんの人たちと出会い、支えられてきたのだと改めて思います。

これまでの数々の出会いに感謝し、母校甲府西高が百二十年の長い歴史の中で育まれてきた「品格」をこれからも持ち続けながら、さらに発展してゆくことを心より願ってやみません。

山梨県立甲府西高等学校　ＰＴＡ会長
山岸 和仁

創立120周年を迎えて

甲府西高等学校が創立１２０周年の慶事を迎えられましたこと、心よりお慶び申し上げます。

また、この節目の時に関わらせて頂くことを大変光栄に感じており、ＰＴＡを代表して大変うれしく思っております。

甲府西高等学校は高等女学校からの、長い歴史の中でその時々の時代の要請に応えながら、個性と創造性に溢れ、教育目標「自己を知り　自己を深める」のもと、心身共に健やかな生徒の育成に取り組んで来られました。

このような素晴らしい伝統の下、県内でも引けを取らない校風の中で学べることは、生徒とその保護者にとって、心のよりどころとなっています。これも一重に歴代校長先生を始め、教職員の皆様方の愛情と熱意のある教育姿勢が脈々と受け継がれてきた事、さらには地域の皆様の暖かいご支援ご協力の賜物であると、あらためて感謝申し上げる次第です。

現在私は、ＰＴＡ会長のお役目を頂き、時折学校に足を運ぶ機会が増え、中庭の銅像「大空」を見るたびに思い出されます。

私ごとですが、40年前、創立80周年記念の年、本校の在校生であり、金田一春彦教授の記念講演やボニージャックスの記念音楽会等盛大に行なわれた事を覚えています。

当時１学年９クラス、１，２００人を超える生徒で盛り上がりました。

今では生徒の数こそ変わりましたが、県内で最も早く単位制を導入し、国際バカロレアやＩＣＴの活用など時代の変化に対応した教育活動を展開しています。

公立高校でありながら、特色ある教育を打ち出すのは、時には難しいこともあるかもしれませんが、強い思いで、ご自分たちが信じる教育を実現されている校長先生はじめ教職員の皆様には、頭が下がる思いです。改めてお礼を申し上げます。

どうかこの先も、子供達の健やかな成長と勉学の場として益々の発展をされ、１３０年、１４０年と歴史を積み重ねていかれることを願っております。

この節目の時を契機として、学校・家庭・同窓会・地域の皆様で協力し、今後の甲府西高校のより良き道筋を導いていく事が不可欠では無いでしょうか。やがて、巣立っていく子供達に未来への思いを繋いでいく形を表すのが、筋目の記念事業の役割なのだと思います。

今日まで本校にかかわってこられた全ての方々の思いが、歴史と伝統を引き継ぎ、まますますの更なる発展と大きく飛躍されることを心より祈念いたしまして、お祝いの言葉に代えさせていただきます。

１２０周年記念、誠におめでとうございます。

山梨県立甲府西高等学校 生徒会会長
姫野 爽士

困難を乗り越えて

私たちが学ぶこの甲府西高等学校。その歴史は遂に120周年を迎えました。この節目を迎え、120周年という歴史が、これまで長きにわたって諸先生方や西高で学び卒業していった先輩方により培われたものであると改めて実感するとともに、この記念すべき年に籍を置けたことを喜ばしく思います。

ここ数年、私たちは西高の伝統が絶たれそうになる経験をしました。それは、新型コロナウイルス感染症です。感染症の影響で、入学式や卒業式を初めとした学校行事は軒並み中止、日々の授業や部活動ですらままならない日々が続きました。その影響は私たちにとってあまりに大きく、そのような状況を経験して、初めて「何気ない日常は当たり前ではない」ということを痛感しました。

特に問題となったことは、伝統の継承です。中でも、本校の代名詞とも言える鳳凰祭は、過去の先輩方が繋いできた伝統の賜物であり絶やす訳にはいきません。

当時の先輩方は、どうにか出来ることを模索し、沢山の制限の中でもしっかりと後世へ伝統を繋いでくれました。コロナ禍が始まって3年間が経った今年、そのバトンを受け継いだ私たちは、多少の制限はありながらも一般公開や出店の再開などほとんど従来の鳳凰祭に近い形での実施にたどり着くことが出来ました。

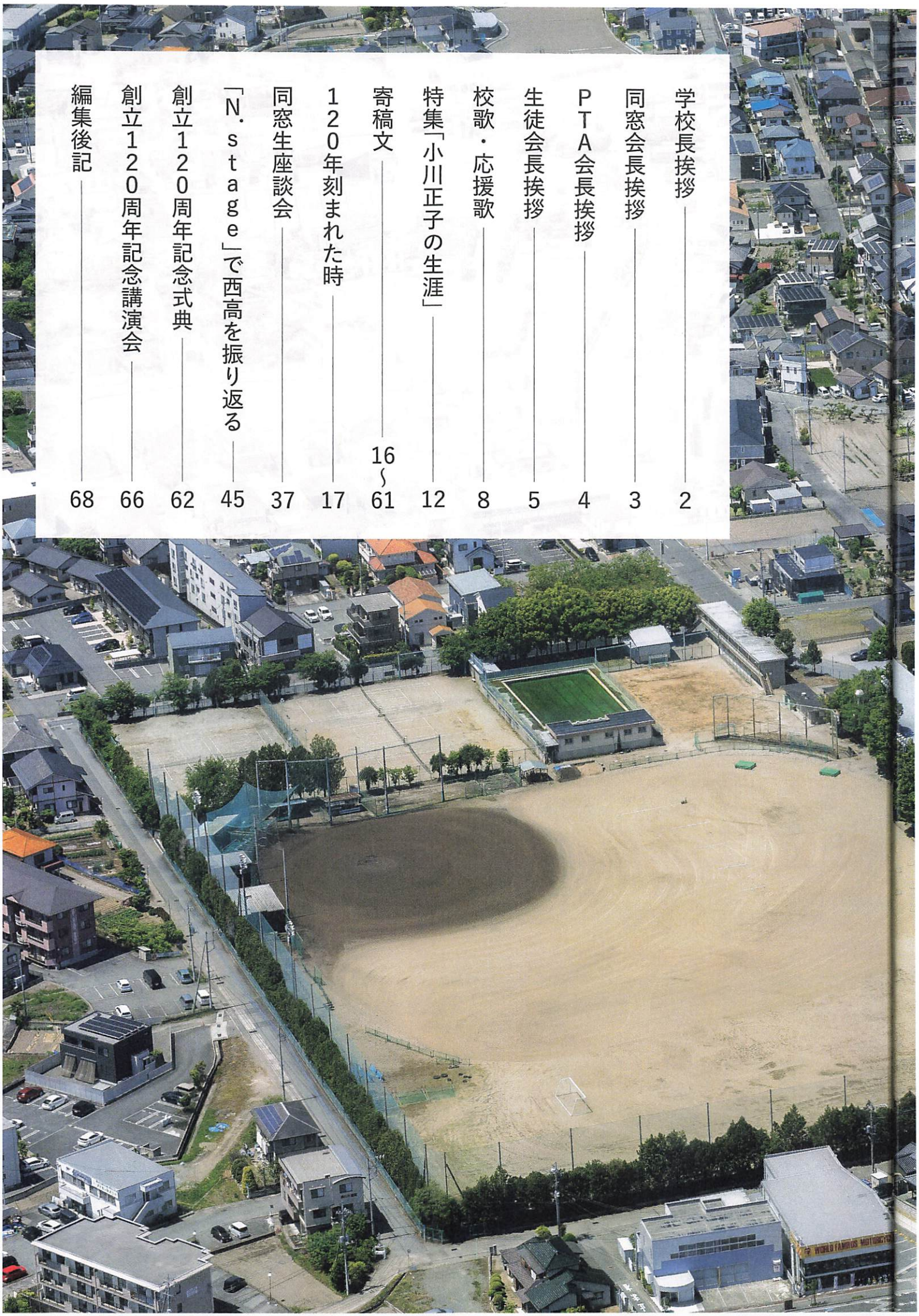
鳳凰祭以外でも、たくさんの場でコロナ禍以前の活気を取り戻しつつあります。現在、西高には581名の生徒が在籍しており、それぞれが学習にも部活動を始めとした課外活動にも懸命に取り組んでいます。その成果は進路実績や、部活動の関東大会をはじめとした上位大会、全国高等学校総合文化祭などの出場といった形で現れています。

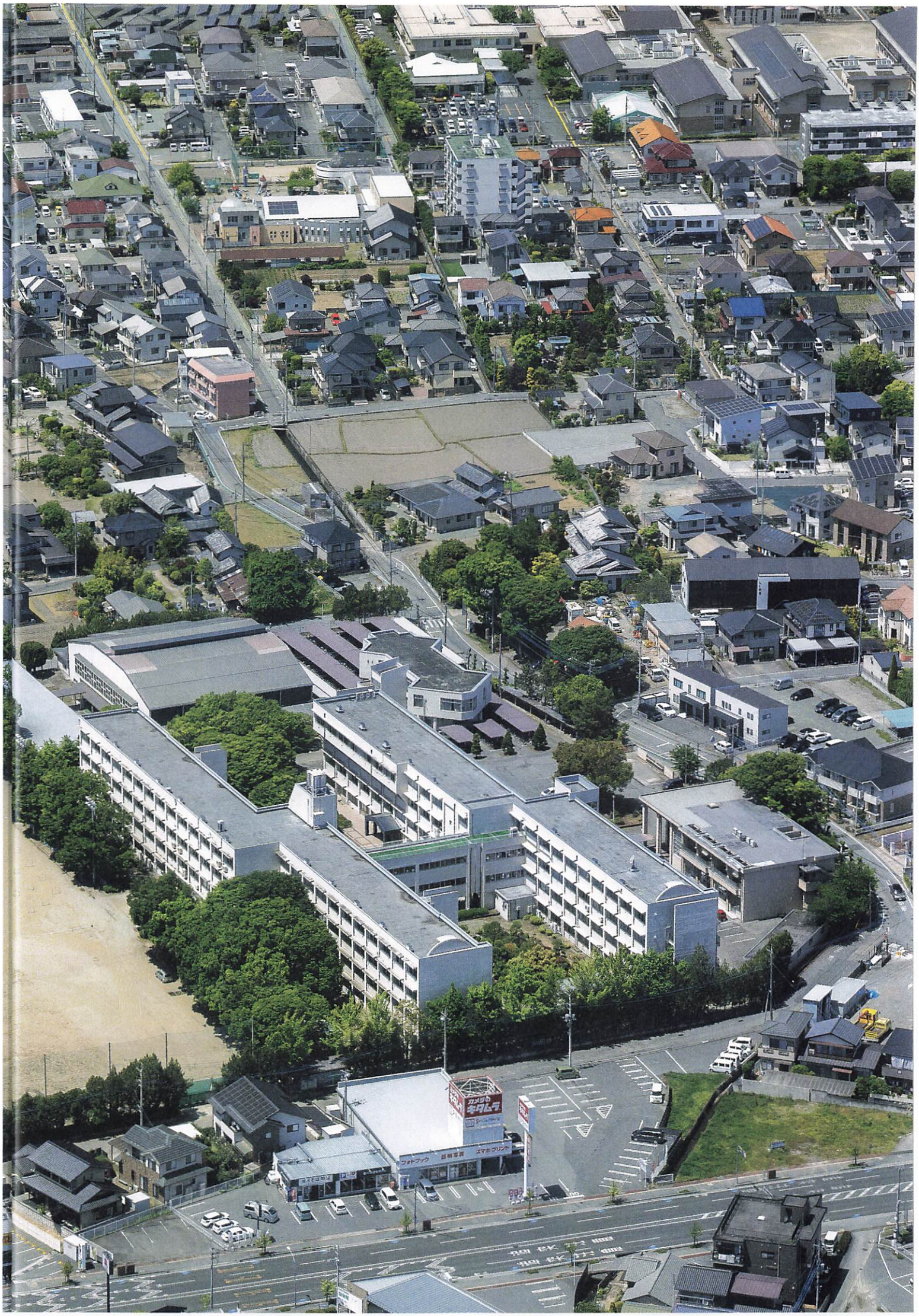
また、私たちの学校生活を支えて下さる先生方は、学習指導や部活動の指導にとても熱心であり、先生方の熱い授業は一生心に残り続けること間違いありません。毎年行われている球技大会や体育祭では、先生方も積極的に参加して下さり、大いに盛り上がりました。

現在、私たちがこのように充実した学校生活を送ることが出来るのも、同窓会の皆様、PTAの皆様、諸先生方、西高に関わって下さる多くの方々のおかげであることを深く感謝しているとともに、この度120周年を記念して沢山のご支援を賜り、厚く御礼申し上げます。

こうした一つ一つに皆様の西高に寄せる期待の大きさと想いの深さを感じ、私たちはこれからも学校生活に精一杯取り組んでいかなければならないと心を新たにしています。私たちは、この伝統ある甲府西高校で学べる喜びと誇りを胸に、さらに素晴らしい学校となるよう日々努力していきたいと思います。

学校長挨拶 ―― 2
同窓会長挨拶 ―― 3
PTA会長挨拶 ―― 4
生徒会長挨拶 ―― 5
校歌・応援歌 ―― 8
特集「小川正子の生涯」 ―― 12
寄稿文 ―― 16～61
120年刻まれた時 ―― 17
同窓生座談会 ―― 37
「N・stage」で西高を振り返る ―― 45
創立120周年記念式典 ―― 62
創立120周年記念講演会 ―― 66
編集後記 ―― 68




カメラのキタムラ
証明写真
フォトブック
スマホプリント

山梨県立甲府第二高等学校
山梨県立甲府西高等学校

校歌

作詞　尾崎　喜八
作曲　平井康三郎

一　立ちならぶ四方の山々
　　めぐり出る豊の流れに
　　美はしや甲斐の国中
　　歴史古る大き都よ
　　ここにして母校のいらか
　　玉の窓空に映えたり

二　身は鍛へ心清めつ
　　いや深く学を修めて
　　世の幸と国の栄に
　　つくさなむ高き理想よ
　　その夢のうつつの姿
　　まなかひの富士に見るかな

三　峡深く結ぶ粗玉
　　磨かづば光あらじな
　　秀づべき資性のさまざま
　　生ひ立たす愛の母校よ
　　称へなむとこしへかけて
　　甲府なるわが西高
　　〔第二高校〕

山梨県立高等女学校
山梨県立甲府高等女学校

校歌

作詞　本多亀三
作曲　三谷良太

一　底つ岩根に真木柱
太しき立てし学び舎の
庭に皇恩の露繁く
育つ我等ぞ　幸多き

二　皇国の鎮と峙ちて
千代に動かぬ富士の嶺の
霊しき姿を仰ぎつゝ
節操の心　高めなむ

三　皇国に無雙勝景なる
金渓をしのぶ荒川の
清き流れを鑑とし
貞淑の心　磨かなむ

四　未だ二葉なる姫小松
教への雨にうるほひて
春立つ毎に色を添へ
栄えゆくこそめでたけれ

応援歌「おお我が選手」

作詞　松谷達男
作曲　井上たか

一、おお精鋭の　我が選手
走れ　飛べ　投げよ
光輝ある母校の歴史を負うて
堂々と　正々と　力のかぎり
若人の意気と熱もて
いざや　征け
ふるえ　ふるえ　西高　甲府西高

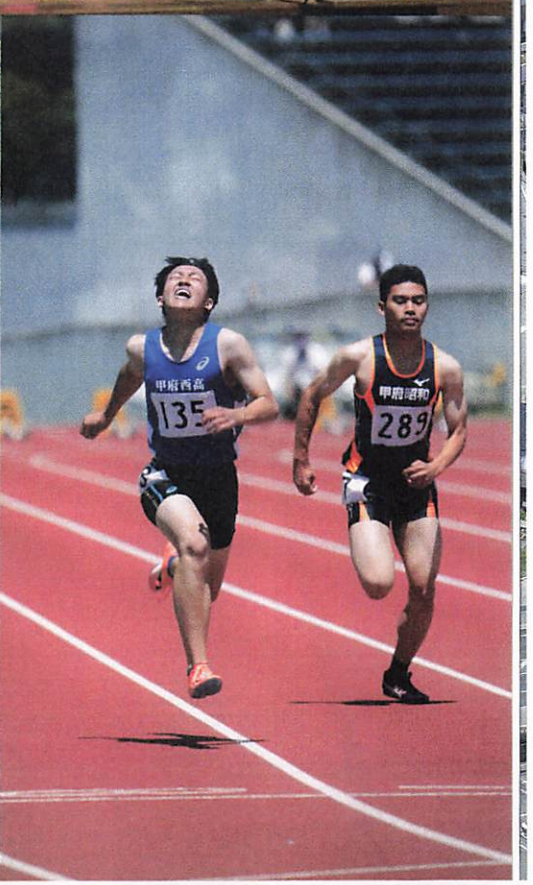
二、おお俊秀の　我が選手
泳げ　打て　躍ねよ
光輝ある母校の歴史を負うて
鍛えこし　そのわざの
すべてをここに
スポーツの精神をもて
いざや　征け
ふるえ　ふるえ　西高　甲府西高

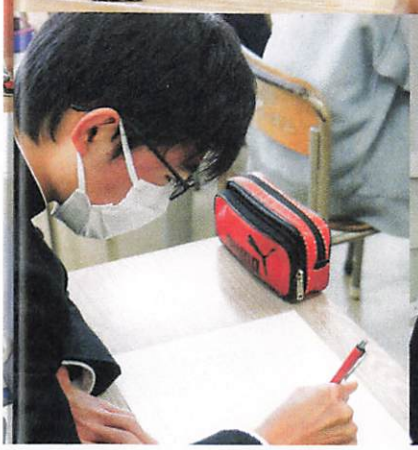
三、おお勇壮の　我が選手
謳え　その　いのち
光輝ある母校の歴史を負うて
さっそうと
溌剌と瞳あかるく
青春の　その誇りもて
いざや　征け
ふるえ　ふるえ　西高　甲府西高

甲府西高等学校
Kofu Nishi High School

甲府西高校
4
1
6

A


甲府西高
135
甲府昭和
289



校歌
一 立ちならぶ四方の山々
めぐり出る豊の流れに
美ほしや甲斐の国中
歴史古る大き都よ
ここにして母校のいらか
五の窓 空に映えたり
二 身は鍛へ心清めつ
いや深く学を修めて
世の幸と国の栄に
つくさなむ高き理想よ
その夢のうつつの姿
まなかひの富士に見るかな
三 峡深く結ぶ組玉
磨かずば光あらじな
秀づべき資性のさまざま
生ひ立たす愛の母校よ
称へなむとこしへかけて
甲府なるわが西高
第四十三回卒業生一同
平成二年三月一日
足崎春八 作詞
平井虎三郎 作曲

120周年記念誌特別特集
「愛の道を駆け抜けた」小川正子

甲府西高新聞

発行
甲府西高新聞部
〒400-0064
甲府市下飯田4-1-1
Tell 055-228-5161(代)
Fax 055-228-5164

120周年誌号

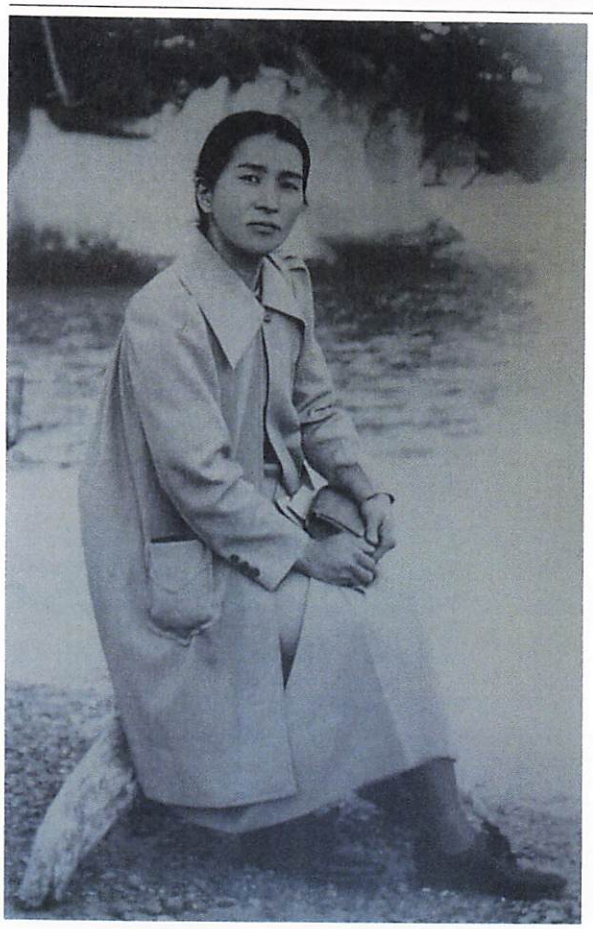
小川正子の生涯

医師になるまでの正子

明治三十五年、小川正子は現在の春日居町で誕生した。父の清貴は製糸工場を経営する名士で、また母のくには、お茶の水女子大学の前身である東京女子高等師範学校を卒業している。そのような経緯から、正子自身も幼少期から英才教育を受けていたという。また、幼いころから男勝りな性格であったらしく、その後の精力的な医療活動を鑑みると、このような性格がその原点だったともいえるだろう。

その後、山梨県立高等女学校（本校の前身）を卒業し、また大正十年には、後に衆議院議長となる樋貝詮三と結婚することになる。しかし、家庭の不和や、自ら望んでの結婚でなかったこともあり、およそ二年後に離婚してしまう。そして、経済的に自立して生きていくことを選んだ正子は、東京女子医学専門学校（現在の東京女子医科大学）に入学し、医療の道に進むことを決意する。

大正時代は「職業婦人」などの言葉に代表されるような女性の社会進出が進んだ時代であったが、実際にはその大部分が家計補助的な女性たちであり、そういった意味では経済的な自立を目指した正子は、とても先進的な存在であったといえる。



小川正子
（笛吹市春日居郷土館・小川正子記念館所蔵）

小川正子の生家

ハンセン病との出会い

昭和四年、専門学校に在学中の正子は人生の転機を迎える。その年にハンセン病療養所の一つである多磨全生園を訪れた際に、後の上司となる光田健輔と出会う。光田は「救らいの父」と呼ばれ、ハンセン病治療の第一人者であり、正子は彼の話を聞いたことがきっかけでハンセン病治療の道を志すようになる。

その後、ハンセン病治療に携わる決意をした正子だが、親族の猛烈な反対に直面することとなった。当時、ハンセン病は一般的に誤った認識が広がっており、正子がハンセン病に罹患することを恐れた親族が、何とかして思いとどまらせようと説得しようと計画した。

しかし、最終的には半ば強引な形で一人家を飛び出してしまったという。これも正子の芯の強い人間性がうかがえるエピソードであるが、それと同時にこの決断が怒涛の人生の岐路であったといえるだろう。

ハンセン病治療に従事するために山梨を飛び出した正子は、新たに建設された国内最大規模のハンセン病療養所である、長島愛生園を目指した。

昭和七年、正式に愛生園で採用され、本格的に治療に関わっていくこととなった。

長島愛生園での正子

正子が行った医療活動は、正子が残した手記がもとになっている著書「小島の春」にまとめられているが、精神的にも物理的にも大変な重労働だったといえる。というのも、愛生園での仕事は、その施設に入所している患者の看病だけではなく、ハンセン病に罹患していると思われる人を直接訪ねて、検査を行ったうえで愛生園へ来るように説得する、「検診」というものがあったそうだ。その際に、患者によっては山中の集落などの行くことが困難な場所に赴く必要があった。車が使えない道を数時間かけて歩くようなこともあったという。また、精神的には、罹患者を説得する際に困難を強いられたそうだ。既述のように、当時、ハンセン病は治療できないなどといった誤った認識が一般的に広がっていたため、罹患者の親族が愛生園への移送に強く反対してくることもあったという。

こうした過酷な環境でも正子はハンセン病治療に従事し続けたのは、ひとえに彼女の崇高な志と精神力があったからだといえる。また、著書「小島の春」の中でも出てくるが、彼女の活動の根底には「愛生園という楽園を作り、ハンセン病の罹患者にも幸せに暮らしてほしい」という強い慈悲の精神があったようにも感じられる。

生きてゆく日に
愛と正義の十字路に立たば
必ず愛の道に就け

愛生園を拠点に精力的に活動していた正子は、その後過酷な労働がたたり、病魔に冒されてしまう。昭和十二年のことであった。正子は結核を発症してしまい、結果的に山梨の生家で療養することになる。その後の闘病生活は昭和十八年まで続くこととなるが、この間に正子の著書である「小島の春」が映画化されるなど、自ら活動できなくなってなお、ハンセン病治療に貢献しており、その点からも彼女の偉大さが感じられる。

死期の間近いことを予感した正子は女学校時代のクラス会に次いで、すぐにまた小学校の同級会を開いた。初恋の相手である有泉馨海軍軍医大尉を一目見たかったということも理由の一つであったようだ。そのころ、大尉はちょうど帰港していたため、正子は初恋の相手との再会を果たした。また、同級生と共に用意した国旗に武運長久祈願の寄せ書きをして正子が手渡し、思いを遂げることができた。

正子が晩年に書いた日記

ハンセン病とは

ハンセン病とは、らい菌の感染によって起こる慢性感染病で、らい菌の発見者であるノルウェーのアルマウェル・ハンセン医師の名に因んでつけられた。

普通は皮膚の外傷が感染の始まりである。一般に最初に現れる症状は、刺激への感覚が悪くなることや、斑紋など。重くなると眉毛、頭髪が抜け、視力障害や手足に結節（こぶ）ができ、斑紋からは膿が出てくる。そして栄養失調をおこし、体が衰弱して、死に至るのである。感染力は極めて弱いものだが、感染から発病までの潜伏期間が長く、平均して三年から四年、中には十年から二十年以上もたってから症状の現れる人もいる。潜伏期間が長いため、結婚して家庭を築き上げた頃に発症することもあり、家庭に与える悲惨さはとても大きいものがあった。

かつては不治の病とされてきたこの病気も、「プロミン」という薬の発見により治療が飛躍的に進歩し、現在では医薬や医療の進歩によって治る病気になっている。

小川正子の人生
希望の園石碑より

明治三十五年（一九〇二）
三月二十六日山梨県東山梨郡春日居村に生れる
大正七年（一九一八）
山梨県立高等女学校（甲府高女）卒業
昭和四年（一九二九）
東京女子医学専門学校卒業
昭和七年（一九三二）
一生を救癩活動に捧げることを決意国立癩療養所長島愛生園に就任以後同療養所で患者の治療に当るかたわら当時不治の業病として世間から隠され逆境に追いつめられていた癩病（ハンセン病）患者を愛生園に収容する活動に献身する
昭和十三年（一九三八）
四国、中国地方を初め瀬戸内の島々の患者の家を訪ね検診や入園勧誘のさまをつづり叙情豊かな「小島の春」として発刊、この書は数十万の読者にハンセン病に対する認識を改めさせ患者と家族に光明をもたらし映画化もされる
昭和十八年（一九四三）
四月二十九日肺結核のため四十一歳で没す

現代に残る
小川正子の軌跡

小川正子記念碑

正子と甲府西高校

本校の中庭には小川正子記念碑が設置されている。この碑は甲府二高であった昭和三十九年に二高PTAと同窓会、山梨県医師会が企画して作られたものだ。安山岩でできており、碑面には正子の短歌「夫と妻が親とその子が生き別る悲しき病世に無からしめ」の文字が刻まれている。除幕式は正子の命日である四月二十九日に執り行われた。

式の後には体育館で記念講演会が正子の同級生などによって行われ、書道教室では遺品展が開かれた。

令和三年の鳳凰祭では三年生の劇で小川正子を取り上げたクラスがあった。生物の授業でハンセン病についての知識を得て、全校生徒に伝えたいと考えたため企画したそうだ。今では隔離政策による差別への批判もあるが、感染症の拡大を防ぎたいという彼女なりの使命感のもと行動していた姿を表現した内容であった。

また、ハンセン病治療に従事した功績から、昭和五十九年に春日居町から名誉市民の称号を贈られている。さらに春日居町には正子の詠んだ短歌が、歌碑（石碑）として残されている。昭和十九年に、同級生により「仏念寺」に建てられた碑がその起源だというが、記念館が設立されてからは、春日居町の町おこしの一環としても活かされている。現在は、春日居町駅を始め、五カ所に歌碑が建てられている。

正子の座右の銘とは

新聞部は、令和三年に発行した定期新聞二一四号で小川正子の姪にあたる吉原五鈴子さんにインタビューを行った。吉原さんは、以前中学校校長をされていた方で、小川正子の生き様を講演会などを通して広める活動もされてきたという。

吉原さんは「正子の座右の銘であった『生きてゆく日に愛と正義の十字路に立たば必ず愛の道に就け』というのは、正論ばかりを通そうとすると世の中ではギスギスしてしまう。そこに温かい思いやりや相手の立場に立つことが大切だということを、身をもって示してくれたのが正子であったと思います。そうでなければ、ハンセン病の活動はできなかったのではないでしょうか。コロナ対策において偏見や誹謗中傷がソーシャルネットワークサービスなどで飛び交ったりしていますが、そのせいで自分の将来を挫いてしまう人が出ることはとても残念です。人として当然のこと、平等な思いを再確認するためにも、ぜひ『小島の春』を読んでみてください」と話された。

最後に

全体を通して四十一年間というあまりに短い生涯を送った小川正子。当時のハンセン病治療については、そもそもの対処方法が誤っていたのではないか、などといった論説を見かけることも多々ある。確かに、科学的に考えるとより良い方策があり、当時の活動は今考えると最善のものではなかったのかもしれない。

一方で、正子がハンセン病罹患者の幸せを一途に思い続けていたことや、自らの命を削りながら活動に従事していたこともまた事実である。

こうした正子が生涯をかけて実践した「他者に尽くす生き方」は崇高なものであると同時に、模倣しようとしてもなかなか難しいことだろう。しかし、甲府西高等学校の偉大な先輩である彼女の人生や心情を心に刻むだけでも、人生の一片の道しるべとなってくれるのではないだろうか。

（二木・山本）

編集後記

令和三年に発行した二一四号からさらに取材を深め、小川正子の生涯についてをまとめさせていただいた。卒業生としてもう一度新聞の編集作業をしてみて、高校生だった頃の自分を振り返り、充実していた西高生活を思い出す機会となった。

この記事を仕上げるにあたり、小川正子記念館様には多大なるご協力を賜りましたことを御礼申し上げます。

甲府高等女学校卒業の先輩から伺ったこぼれ話

▼1942年に始まった甲府高女での生活は、多感な少女たちに日々の大切さと平和の尊さを感じさせるものであった。▼大東亜戦争が開戦し、様々な物資が制限された。制服はセーラーなら何でも良いとされた。革靴や腕時計を身につけることは禁止され、万年筆の使用も不可となった。そのため、教室ではみんなで赤い鼻緒を作り、白木の下駄で通学した。▼しかし、ダメと言われるとやりたくなるのが青年期の若者である。少女は腕時計をして行ったり、観てはいけないとされていた映画に母と出かけたりした。▼秋になると強歩大会が行われた。学校と早川橋を往復するコースである。少女は学校を出て千秋橋から浅原橋までずっと走り続けた。鰍沢の検印所を通過し、富士川沿いを歩き進んでいると月見橋のあたりで三年生の一位の先輩とすれ違い、先輩の速さにとても驚く。その後、早川橋の石の上でおにぎりを食べ、歩く気持ちがなくなったためリタイヤし、バスで学校まで戻った。▼三年生になると授業はなくなり、学徒動員が始まった。他学年の生徒は工場などでの立ち仕事であったが、少女の学年は東京から疎開してきた貯金局の仕事であった。二か月間の準備教育を受けたものの、少女たちはそろばんを使った利子計算などに不安を覚えつつ、一生懸命に勤労した。▼甲府空襲によって校舎は全焼してしまった。授業は県内数か所(穴切・花鳥・右左口・上野・押原・敷島・韮崎・日野春)に分かれ、甲府では穴切小学校にて床に座る形式で行われた。終戦時には疎開してきていた生徒の分で二クラス増えた。卒業式は焼け残った甲府工業で行われ、久しぶりに全員集まることができ、とても嬉しいことであった。▼戦争の影響を大きく受けた学生生活。食べ物や着るものが限られた中でも、学友と会うことの楽しさを感じた少女時代の思い出は今も鮮明に思い出される。

還暦の記念に文化ホールに記念碑を建て、ハナミズキを植樹した。(甲女四十二回生)

甲府二高で学んだこと

甲府西高校同窓会顧問
坂本 悦子
甲府二高15回（昭和38年）卒

PROFILE

昭和42年　山梨県高等学校社会科教員採用
平成7年　県立高校初の女性管理職
山梨県教育委員会生涯学習課・
山梨県教育委員会高校教育課
公民科指導主事
平成10年～　甲府東高校教頭
ふじざくら支援学校校長
甲府南高校校長
平成17年　甲府南高校校長退職
平成29年　甲府西高校同窓会会長

私は昭和三十五年四月、甲府二高へ入学しました。姉二人とも甲府二高の卒業生でしたので、他の高校への選択肢は全くありませんでした。その上、甲府二高の正門から東へ百メートルほどのところに家がありましたので、チャイムが鳴ってからでも間に合いそうな距離でした。

甲府二高に入学して、当時は全県一区だったのでしょうか、遠くから通学している人もいました。担任の先生からこんな近くに住んでいるのだから、学校のために働くように言われ、二年生からは生徒会本部役員となりました。授業が終わると生徒会本部室に直行していました。高校二年間、生徒会本部役員をして他のクラブ活動には入部することはできませんでした。

当時甲府二高は文武両道に優れていました。総合体育大会で優勝し、緑が丘総合グランドから学校まで、優勝旗を持って行進しました。大変誇らしい行進でした。在学中に六十周年記念式典を経験しました。

学園祭は大変活発で、特に印象深く残っているのは、先生方が演劇をして私共生徒に見せてくださったことです。それも大変立派な、本格的な演劇だったように覚えております。

進路を決めるときは、兄弟の末っ子でしたので、県内の大学ということで山梨大学学芸学部中学校課程社会科に入学しました。四年間の大学生活の後、山梨県の教員試験を受け、高校の教員となりました。新採用は甲府二高となりました。四年後でしたので、高校生の時教えていただいた先生方も多くいらっしゃり、緊張した日々を送ったのを覚えています。生徒として通学した学校のたたずまいと変わらず、木造校舎は懐かしいものでした。新採用教員として、皆さんに大事にしていただきました。高校三年間は女学校でしたので、どんなことも女性で対応していました。高校生としての三年間、そして新採用教員としての経験で、女性だから、という考え方をしない、一人の人間として事に当たるという考え方を養ったように思います。

遠隔地要員として吉田商業高校に四年間勤務し、再び甲府二高に勤務することになりました。甲府二高から甲府西高に変わる時でした。女学校から男女共学となり、制服をどうするか、校歌をどうするかなどいろいろな委員会が作られて検討しました。八ヶ岳寮にも男子棟が作られました。甲府二高の校舎からの引っ越しの最後の夜、先生方全員が肩を組み校歌を歌って校舎にお別れしたのを思い出します。

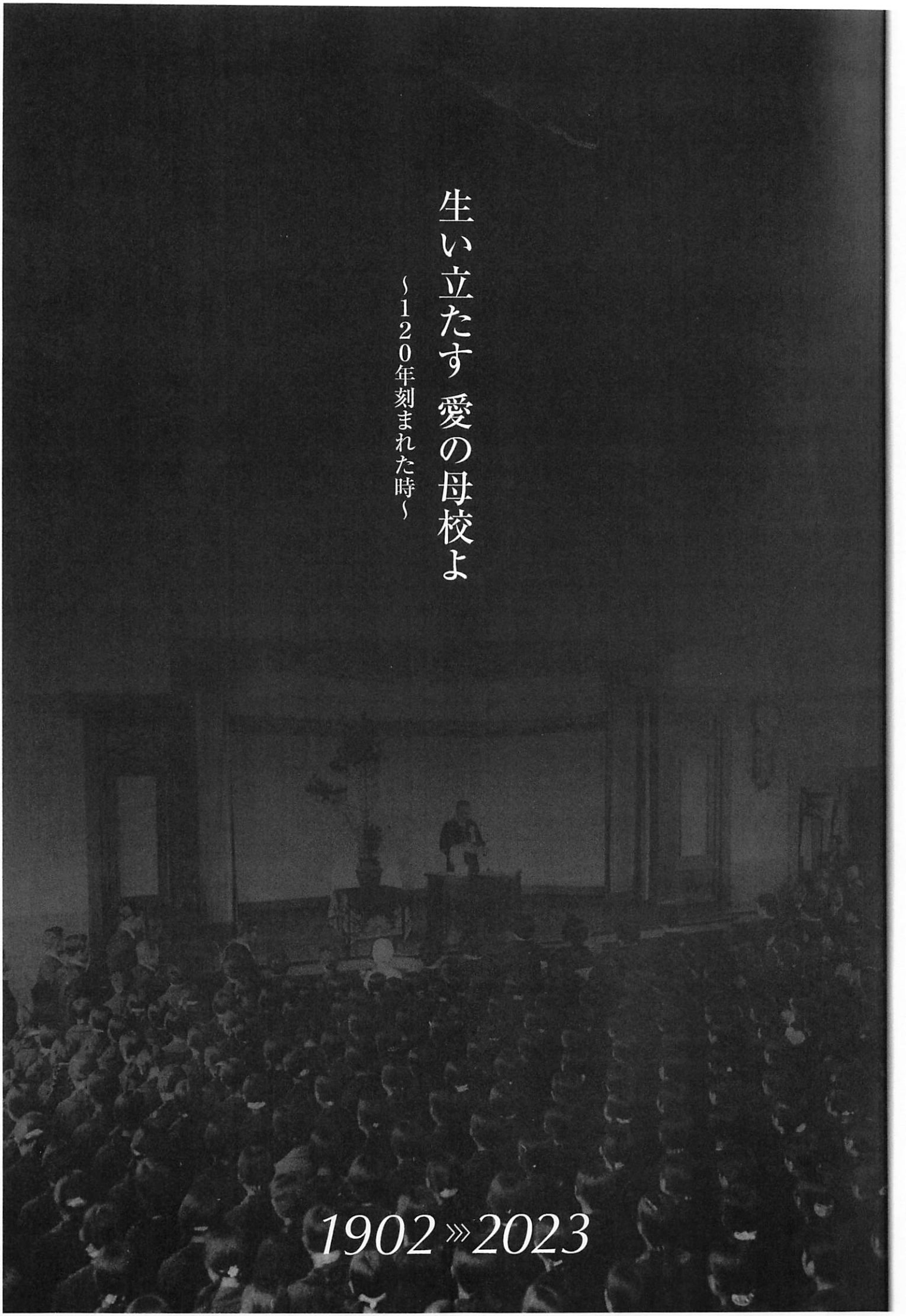
個人的には吉田で一人、戻って二人の子供を出産しました。三人の娘の母親となり、なりふり構わず子育てと学校の仕事をこなしてきました。どんな風にしていたのか、今思うと恥ずかしい限りです。

母校を思うと甲府高女から甲府二高、甲府西高と脈々と受け継がれているのは、ゆったりとした大河の流れのような、穏やかな精神の中に端然とした毅然とした力強さです。高校三年間という多感な時期に身についた精神は、私の生涯の軸となったと思っています。現在の高校生にも是非身につけていただきたいと思います。

百二十年という歴史は多くの同窓生と在校生の母校愛に支えられて作られたものだと考えます。これからも永遠に続いてほしいと願っています。

生い立たす 愛の母校よ

～120年刻まれた時～



1902 ≫ 2023

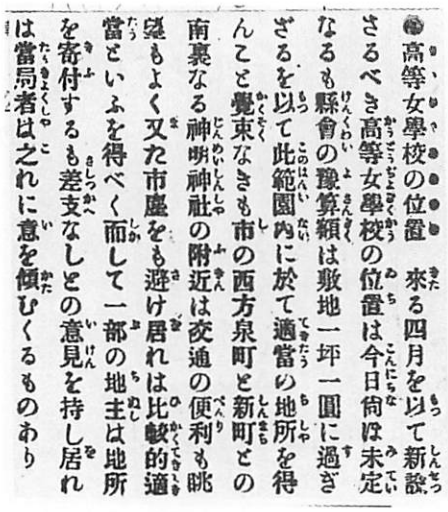
開校、麗しき伝統のはじまり

1902 »» 1923

明治35年～大正12年

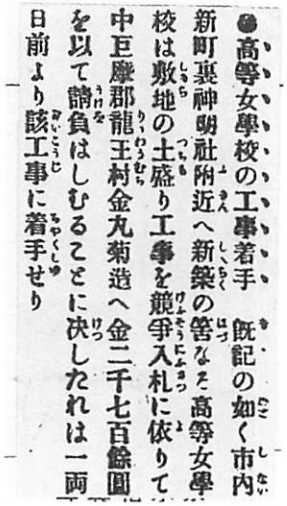
限りなき夢に向かい学びに喜びを重ね、社会の一員として目覚めゆく女学生たち

開校当時の校門



●高等女學校の位置　來る四月を以て新設さるべき高等女學校の位置は今日尚ほ未定なるも縣會の豫算額は敷地一坪一圓に過ぎざるを以て此範圍内に於て適當の地所を得んこと覺束なきも市の西方泉町と新町との南裏なる神明神社の附近は交通の便利も眺望もよく又た市塵をも避け居れは比較的適當といふを得べく而して一部の地主は地所を寄付するも差支なしとの意見を持し居れは當局者は之れに意を傾ひくるものあり

当時の新聞記事（敷地の決定）
明治34年2月



●高等女學校の工事着手　既記の如く市内新町裏神明社附近へ新築の筈なる高等女學校は敷地の土盛り工事を競爭入札に依りて中巨摩郡龍王村金丸菊造へ金二千七百餘圓を以て請負はしむることに決したれは一両日前より該工事に着手せり

当時の新聞記事（工事の着手）
明治34年8月

明治19年に中学校令が発布され尋常中学校が発達するのに伴い、女子教育も注目され始めました。そして32年に中学校令が改正されると、新たに女子の高等教育を目指して高等女学校令が公布され、これを契機にして日本の女子教育は急速な発展をみせていったのです。「女子教育無用論」もある中、山梨県においても女子教育振興の要請が高まり、これに応えて県立高等女学校の設立が33年に決定されました。

明治35年5月1日、「女子に須要ナル高等普通教育ヲ施ス」を目標に掲げ、修業年限4年、定員400名として「県立山梨県高等女学校」は市内飯沼村の地（現寿町、YCC県民文化ホール）に開校。県下唯一の女子高等普通教育機関として、輝かしい伝統の一歩を踏み出したのです。

38年5月、県立学校の校名改称が告示され「山梨県立高等女学校」に改

歴代校長

初代
中村 正持

第2代
林 光徳

第3代
内田 幾次郎

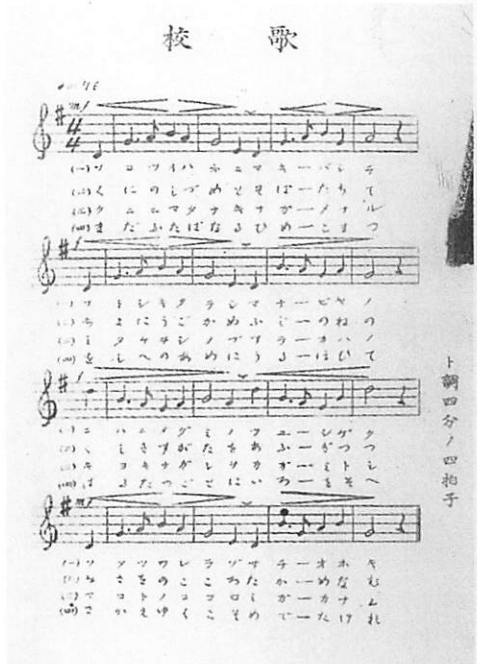
第4代
伊藤 裕

第5代
新井 儀蔵

創立当時の校舎　松林は本校の象徴だった

卒業アルバム　紋付きが正装であった（大正9年）

補習科卒業生　補習科は大正9年に復活（大正11年）



校歌制定　本多亀三作詞／三谷良太作曲
明治40年7月

称。40年には校歌も制定されました。

大正3年に第一次世界大戦が始まり、大戦以後日本は、ロシア革命などの世界的大事件や大正デモクラシーの影響を受け、本県でも中等学校への進学熱が急速に高まりました。列強と伍していくためには、国策として教育奨励策をとる必要があったことや、女子にも結婚や育児にたずさわるにしてもある程度の教育が必要だという自覚が生じ、本校でも大正3年から10年までの間の合格率は30～40％の難関であったと記録されています。

大正8年に発足した原敬内閣は文教政策として高等教育機関の拡充を推進。11年「山梨県立第一高等女学校」に改称したこの時、本校の定員は本科800名、補習科50名の計850名となっていました。

●入學試驗問題　高等女學校にては去る二十日より入學試驗執行中なりしが一昨日にて結了したり試驗問題は左の如し

國語　科　二時間

一　左の文章を解釋すべし

人には怜悧なるもあれども、怜悧なりとて、自ら、怠るべからず、痴鈍なるもあれども、痴鈍なりとて、自ら、棄つべからず、馬は疾く走るものなれども、勉めずしては、遠きに到ること能はざるべし、牛は、歩の遲きものなれども、久しくして、怠らざる時は、千里の遠きにも達すべし、されば、おのおの、至誠の心を以て、忍耐の念を失はず、おのが志すところを、貫かむと、心かくべきなり、

二　左の章句に讀みと解釋とを施すべし

イ　巧に偽らんよりは、拙なく誠あれ、

ロ　暫時なりても暇ある時は、心を專にして修學すべし、朝に温のて、夕に冷すことなかれ、

ハ　洗濯、賀茶、

作文　科　二時間

高等女學校へ入學を勸むる文

運動は大功あり

日は暮れたれば急ぎ家に歸りぬ

算術　科　一時間半

一　職人あり十時卅分の間に壁圍三拾錢の賃金を得たり一時間の賃金何程

二　一個壁圍五拾錢の帽子二十四個を以て煙草二十五斤と換へしに五圍を損せり煙草一斤の代何程

三　$\frac{6}{13}$　$\frac{6+2}{13+2}$　$\frac{6-2}{13-2}$

右の分數を大小の順序に排列せよ

入学試験問題
第2学年志望者だけに行った（明治35年4月21日）

●身体檢査と開校式　山梨高等女學校にては來る廿八日一學年生徒の身体檢査を施行し直ちに入學を許可するよし又同校開校式は未だ確定せざるも多分は來月一日ならん

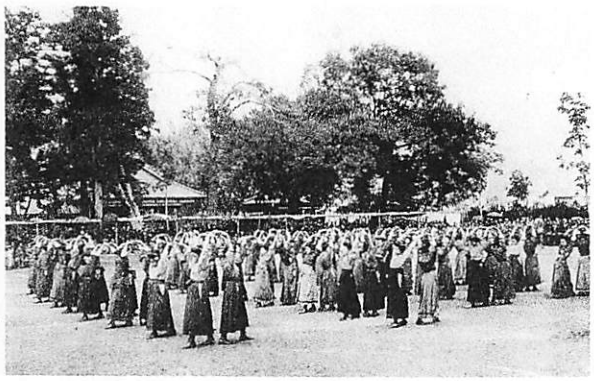
●入學試驗及第者　此程執行したる高等女學校二學年の入學試驗に及第したる者如左

若尾れん、飯田俊子、東浦あい、中村發子、奥村もと、丸茂ひで、小澤こう、淺川たき、佐藤さだ、秀島田鶴子、溝部しづ、藤井ゑい、相川とく、橋野ふみよ、石原りん、加賀美とせ、末木たけの、松浦ひめ、樋口すみよ、八田富子、石原やすよ、跡部さと、深澤よう、市川とみ、田邊のり、野呂瀬いせ、古屋りう、田中いくの、平賀はな、森とみゑ、上田たか、桑嶋まさき、早川ます、森澤きのゑ、野尻てふや、小宮山たまゑ、小林とよ、望月くら、岡治の、山田さと、萩原さかゑ、白井ちよ、小林しづゑ、内藤ます、菅沼まる、内田たか、田村ふたば、歌田ひで、喜多嶋てい、平山やの

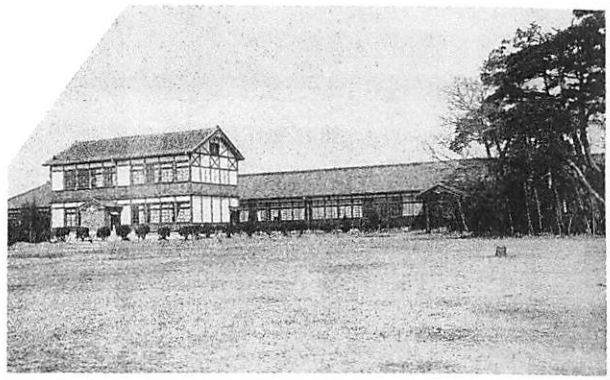
入学試験及第者　第2学年（明治35年4月23日）

一年表一

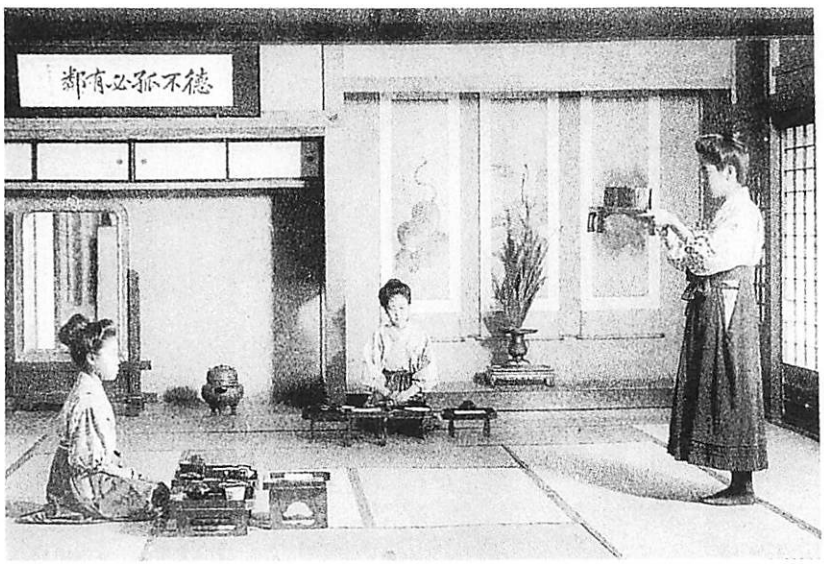
明治32年	高等女学校令公布
明治33年	県知事加藤平四郎、高等女学校設立議案を通常県会にはかる。
明治34年	甲府市寿町に地を選び起工する。
明治35年（1902）	校舎竣工、文部大臣の認可を経て、5月1日県立山梨県高等女学校と称し、開校式を挙げる。修業年限4カ年、生徒定員400名。前高知県師範学校教諭中村正持氏が初代校長に就任する。
明治36年	中央線が八王子から韮崎まで開通
明治37年	日露戦争がはじまる。
明治38年	山梨県立高等女学校と改称する。
明治45年	皇太子殿下が御来校になる。
大正3年	第一次世界大戦はじまる。
大正4年	補習科を廃し、生徒定員本科400名、実科120名、計520名に改める。
大正5年3月	甲府市内でバス営業開始
大正6年	生徒定員本科600名、実科150名、計750名に増加する。
大正9年	補習科を復活する。
大正11年	生徒定員本科800名、実科100名、補習科50名、計950名に増加する。
	山梨県立第一高等女学校と改称する。
	実科を廃し、生徒定員本科800名、補習科50名、計850名に改める。
大正12年9月（1923）	関東大震災



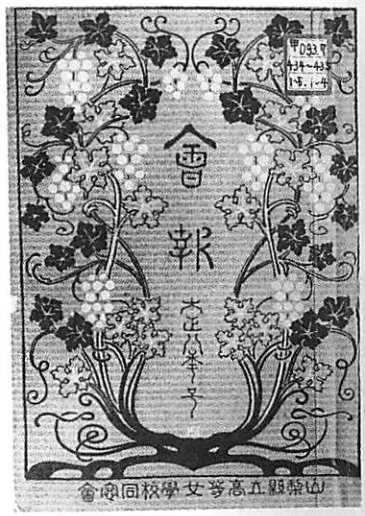
運動会での木環体操（明治43年）
木環体操は、スウェーデン体操の一種で、姿勢の矯正と骨格の欠陥の治療のために行われた。写真は秋季運動会での木環体操の様子。教育・医療体操として考案され、日本の体育教育に取り入れられたのは、明治35年のこと。以後、重要な科目として盛んに行われた。



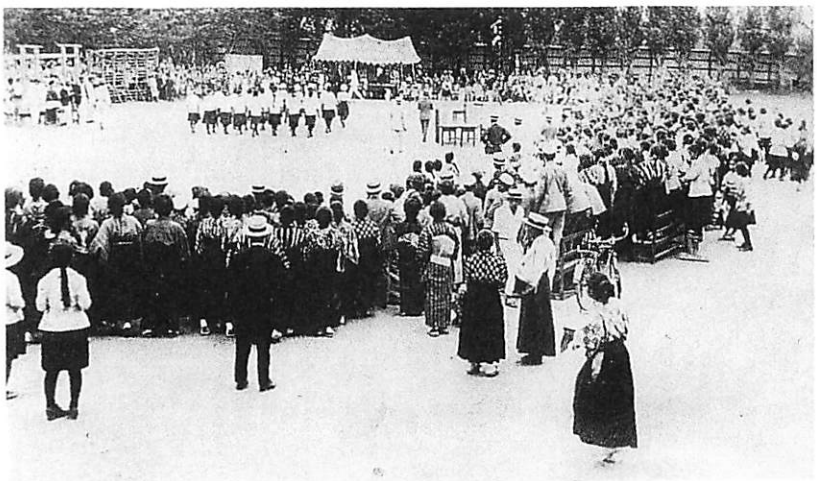
大正8年に成立した原敬内閣は、文教政策として高等教育機関の拡充を積極的に行った。これに伴って翌年本校も本科800名、実科100名、また補習科も復活して50名となり、計950名の定員となった。



作法実習風景（明治44年頃）
膳の上げ下げから、襖の開け閉めまで日常生活に不可欠の作法を習った。



同窓会会報



女学生のテニス試合（大正11年）

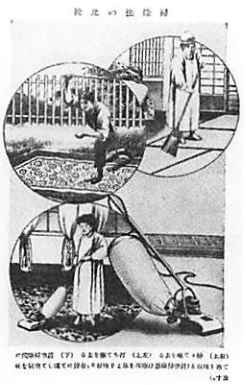
1924 ≫ 1947

大正13年～昭和22年

時代に負けることなく、希望を胸にひたむきに生きる、輝く乙女たちの姿があった。

中等學校で
武道を正科に
文部省の武道振興策

文部省ではスポーツの隆盛武道の振興を目標として來る十八日第一回總會を東京體育運動器具會議の委員の發會に當つては特に新道の確立者講道館主幹嘉納治五郎および武道會々長本郷房太郎大將を委員の中に加へて一般社會並に學校各方面にわたる武道振興方策を攻究することゝなつたが一般社會方面に對する振興方策は體育器具會議の決議答申に待つことゝし學校方面に關しては現在の如く中等學校以上の學校において柔道、劍道を體操の一部として課してゐる程度では到底これが普及振興をはかることは覚ないので中學校並に專門學校の他中等學校においてはいづれも武道を正科として必修せしむることにそれぞれ制度を改正し出來得る限り來る四月よりこれを實施しまた場合によつては全國中等學校以上の學生生徒の武道大會を開催する計畫であると



家事教科書　昭和2年発行

裁縫教室での様子

大正13年、校名は「山梨県立甲府高等女学校」へと改称され一般には「甲府高女」の名で親しまれるようになりました。上級学校への進学熱の高まりを受け、この年生徒定員は本科800名、補習科100名の計900名。しかし、第一次世界大戦後の戦後恐慌に加え、関東大震災の甚大な被害を抱えた日本は昭和恐慌へと陥り、昭和5年には全県的に中等学校の退学者が多く、本校でも11名の退学者が出ました。

昭和6年の柳条湖事件をきっかけに起こった満州事変により日本は国際連盟を脱退。国際的な孤立と苦境を一層深め、さらなる激動の時代に入っていったのです。8年の本校校友誌には「満州事変」や「連盟脱退」などの時代を反映するものが満載され、9年には剣道部が創設。生徒は弓道部か剣道部のいずれかに所属することとなりました。

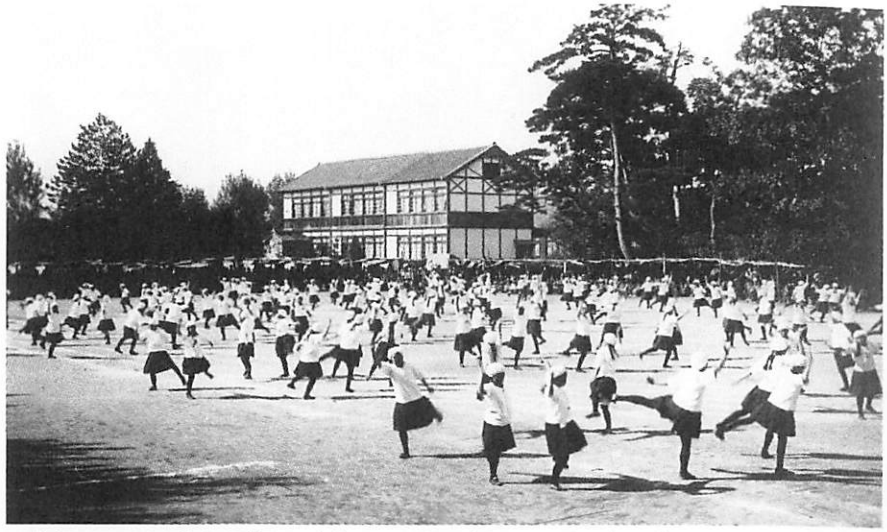
歴代校長

第6代
山中 恵教

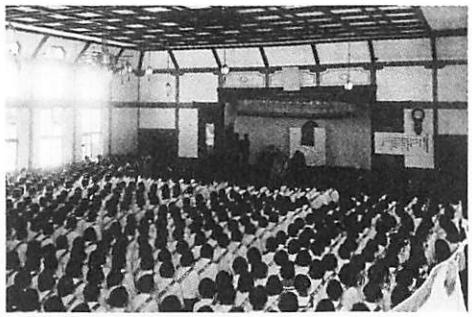
第7代
安島 弘

第8代
幸田 甫

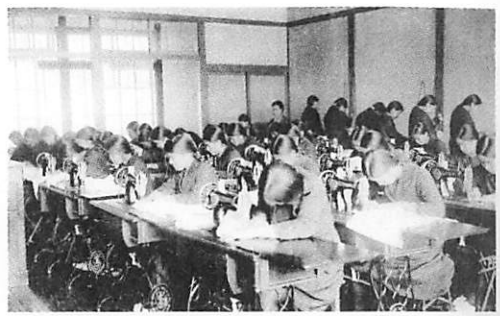
第9代
内藤 竜助



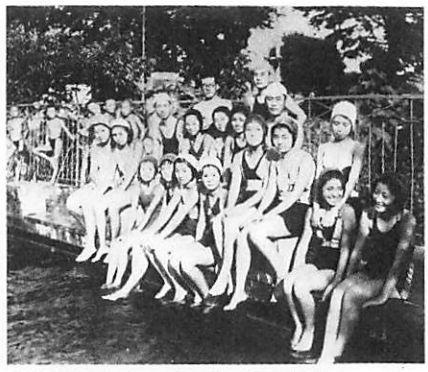
運動会風景　近代的な女学生　自作のくくり帽子（まんじゅう帽子）でダンス



愛国子女団発団式。「報国」の精神のもと、
挙国一致の戦争体制が作られていった



ミシン教室



水泳教室（昭和16年頃）　国民皆泳

当時の服装　洋服はまだめずらしかった

昭和12年7月、日中戦争が始まり、翌年国家総動員法が成立すると全校生徒による甲府高女勤労報国隊を結成。これは翌年、軍事後援や社会事業に参加するという目的を明確化して「愛国女子隊」に再編成されました。太平洋戦争が始まると授業内容はさらに戦時色一色となり、17年6月のミッドウェー海戦での敗北を境に動員体制は一層強化されました。生徒たちのスカートはモンペに履き替えられ、学年ごとにそれぞれの場所で奉仕作業をすることになったのです。

昭和20年7月、甲府大空襲により校舎は全焼、先生らがミシンだけは救出。生徒には死傷者はいませんでした。8月15日終戦。21年3月来日したアメリカ教育使節団は戦後日本の民主化政策の一貫として教育制度改革を勧告し、教育基本法の制定とともに六・三・三・四制を採用。生徒たちも復興に向けて力強く歩みを進めていきました。

戦災直後の甲府市街

クラス担任応召記念

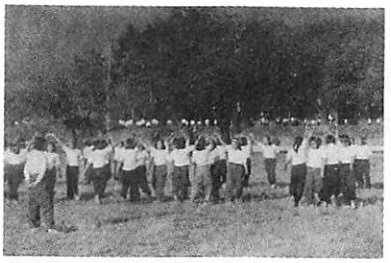
元六三部隊兵舎を校舎として利用した

廃虚となった学校

航空機増産目ざし
女子學徒 勇躍縣外へ
高女上級生、愛知縣下へ出勞

縣内へも動員
女子中等學徒

第一期復興校舎



卒業アルバムより(昭和22年3月)

勤労動員　中島飛行機半田製作所(愛知県)

年表

大正13年4月	山梨県立甲府高等女学校と改称
(1924)	
大正14年10月	講堂を新築する。
昭和3年3月	治安維持法、普通選挙法成立
	起工3カ年継続で、図書、物化、ミシン教室を新築する。
昭和7年5月	創立30周年記念式典を挙げる。
	五・一五事件
昭和8年3月	国際連盟脱退
昭和12年3月	寄宿舎を廃止する。
	2カ年継続で校舎全部の改築に着工
昭和13年4月	蘆溝橋事件(日中戦争はじまる)
7月	国家総動員法公布
10月	新校舎の一部が完成し旧校舎より移転する。
11月	小川正子『小島の春』発表
昭和16年12月	太平洋戦争はじまる
昭和17年5月	梨本宮守正王殿下が御来校
11月	創立40周年記念式典を挙行する。
昭和19年10月	高松宮殿下が御来校になる。
昭和20年7月	甲府市空襲により罹災、校舎全焼
8月	太平洋戦争終結
昭和21年3月	分散授業を廃止し、元六三部隊兵舎を校舎とする。
昭和21年11月	日本国憲法公布
昭和22年1月	元六三部隊校舎火災で全焼。
(1947)	甲府中学校、甲府工業学校で分散授業。
3月	教育基本法公布

甲府高女の思い出

山梨県立甲府西高等学校同窓会理事
女声合唱団リラ会長
古澤　夏喜
甲女42回（昭和21年）卒

PROFILE

1951年に国立音楽大学ピアノ科卒業
山梨県立高校教諭を経て
県芸術文化祭、県芸術祭、
県民オペラ運営委員を歴任
1993年山梨県文化功労章受章
現在は若草開ピアノ教室主催
令和5年度第67回コンサート開催

1942年、大東亜戦争がはじまり、甲府高女に入学いたしました。入学して間もなく創立四十周年でした。物資の制限が入り、入学してせっかく買った革靴はだめで、教室でみんなで赤い鼻緒を作り、白木の下駄通学をしたことを覚えております。

一年の夏、全校生の遠足があり、藤垈の滝、毛無山、松原湖を抽選で決めることとなりました。私は松原湖が当たり、仲の良い友達はほとんどいなくて小海線は貨車。駅から坂道を上り湖にやっとついたと思ったら、1時間くらいしかいられませんでした。何もない湖でした。

秋（昭和17年18年）、早川橋往復の強歩大会。学校を出て千秋橋から浅原橋をずっと走り続け、検印所が鰍沢でした。富士川沿いにだんだん歩き始め、月見橋当たりだったでしょうか、3年生の1位の先輩に会いビックリでした。私は早川橋の石の上でおにぎりを食べたらもう歩く気持ちはなくなり、リタイヤ。バスで帰りましたが、友人は何人も学校へ帰ってきました。

長松寺橋の下に少しばかりの学校農場があり、農事試験場（現美術館）や農家への手伝い、今思うと役に立っていたのかなと思いますが、食料のない時でしたからお昼ご飯をいただいたことは嬉しいことでした。

三年生の一学期で授業はなくなり、私たちの学年は東京から疎開してきた貯金局の学徒動員でした。二か月の準備教育を受け、岡島、甲府教会、内藤呉服店と三か所に分かれ仕事をしました。時々先生方が回ってきました。

1945年春、別れ別れに仕事をしていたけれど、学校の講堂に集まり、久しぶりに友人と一緒にいられたことは嬉しいことでした。学校の校舎の廊下のあちこちで一年上の四年生の方たちが軍の何か仕事をしていました。

卒業してだいぶたってから知りましたが、お弁当を持参できない友もいて、市外から通学してきた友達が分けてあげていたそうです。

七月七日の甲府空襲で学校は全焼、防火壁だけが残っていましたが、近寄らないようにと言われました。それから数か所の分校でささやかな授業をしていただき、甲府は焼失を免れた穴切小学校で床に座って授業を受けました。卒業式は焼け残った甲府工業で久しぶりに全員集ったことは本当に嬉しいことでした。甲府空襲もあり、食べ物、着るもの、何もなかった少女時代でしたが、一日一日は楽しかったです。

九十を超えた今、伝統ある母校のあることは幸せです。本当に心から感謝いたします。

明治41年3月28日
卒業式の写真
大変貴重なものです

時代の変遷。どんな時も躍動感にあふれて

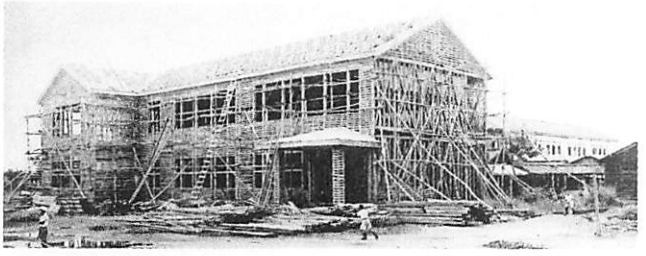
1948 » 1976

昭和23年～昭和51年

時代の流れの中、変化を遂げる母校。その中で生徒は常に未来を見据え挑戦し続けた。

修学旅行の帰りは、神戸から横浜まで1万2千トンの氷川丸に乗船。宿泊は三等船室。畳の部屋だった。（昭和24年5月29日）

生徒会役員（昭和24年）



本館の建築（昭和26年）

昭和23年4月、学制改革により「山梨県立甲府第二高等学校」となりました。24年に第二期復興校舎が出来上がり、それまでの分散授業は終了したものの校庭には未だ戦災者住宅が建ち並んでおりました。これが撤去され学校としての形態が整ったのは26年3月になってからのことでした。

総司令部から強く主張され、学科は普通科に加え、被服課程、食物課程も併置。男女共学制も推進され本校にも初めて150名の男子定員が設定されました。しかし28年になって男子定員枠を外したことから男子入学希望者は減少、30年度を境にして事実上男女共学は廃止となり再び女学校へと戻っていったのです。

30年代に入るとクラブ活動も盛んに行われるようになり、スポーツ、文化両面において好成績をおさめました。

昭和42年に発足した甲府一高、甲府南高による総合選抜制度が定着す

歴代校長

第10代
伊藤 泰司

第11代
小林 定雄

第12代
武藤 英

第13代
岩本 繁人

第14代
鳥居 礼三

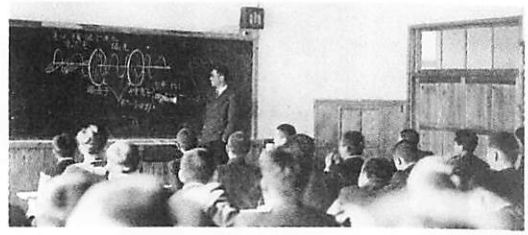
校庭の整備

本校々歌生まる

尾崎喜八先生 作詞
平井康三郎先生 作曲

作曲者の言葉

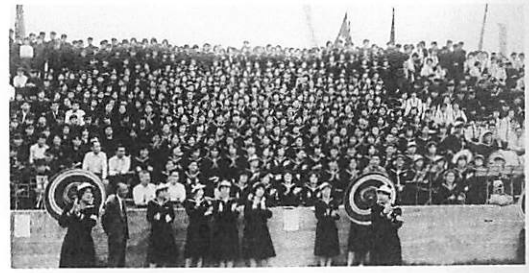
27年10月、尾崎喜八作詞、平井康三郎作曲による新しい校歌が誕生した。



昭和26年男女共学に踏み切り、120名の男子が入学して、校内の空気が変わった。しかし、男子の入学者が少なく、30年には再び女子校に戻った。

校歌合唱

入学式の日（当時としては県下第一の講堂であった）



30年代に入るとクラブ活動が大変活発になり、スポーツ、文化両面で好成績を収めた。

総合体育大会

第1回準優勝	第7回準優勝
第2回 〃	第8回優 勝
第3回 〃	第9回 〃
第4回 〃	第10回準優勝
第5回 〃	第11回 〃
第6回優 勝	第12回優 勝

生徒会誌第6号より

るのに伴い、本校の総合選抜への組み入れが次第に論議されるようになりました。45年の県高校入学者選抜制度審議会においても「甲府二高を早急に適地に移転した上で、総合選抜に組み入れるのが望ましい」という答申が行われ、48年8月には甲府市下飯田町にて新校舎を起工。49年7月の県教委定例委員会での正式決定を経て、50年4月1日、1年生定員470名中男子生徒261名の入学をもって本校は総合選抜による男女共学校として発足しました。生徒会活動にも野球部、サッカー部、ラグビー部、柔道部、剣道部などが新設されるなど、多くの場面で新しいエネルギーが生まれていったのです。

昭和52年4月、「山梨県立甲府西高等学校」と改称。この年に全学年で男女共学となりました。

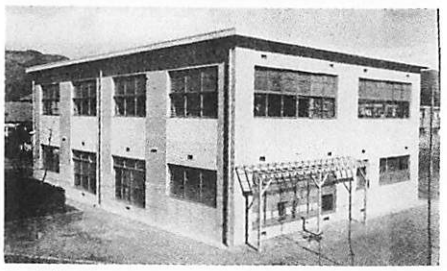
歴代校長

第15代
高遠 啓一

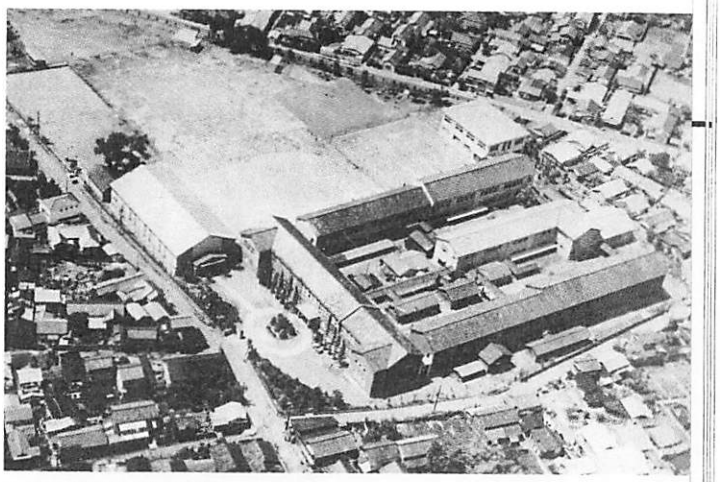
第16代
佐野 録郎

第17代
平塚 武

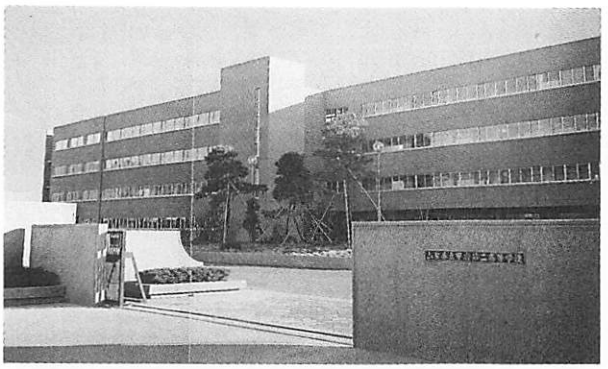
第18代
高柳 雅蔵



図書館外観　鉄筋コンクリート造。階上は閲覧室・整理室、階下はブラウジングルーム・職員閲覧室・視聴覚室ならびに同窓会館。若干の壁面を残して、大型ガラス張りのモダーン・ライブラリーの設計となっている。



昭和35年頃の校舎全景



下飯田に完成した甲府二高新校舎。これがそのまま現在の甲府西高の校舎となっている。

山梨日日新聞
甲府二高 来年度から総合選抜
通学の便宜を考える
県教委決定　今後は山梨・日川問題

山梨日日新聞
（昭和49年7月11日）

年表

昭和23年4月	学制改革のため山梨県立甲府第二高等学校となる。
（1948）	男女共学実施となる。
昭和26年4月	定時制課程を設置する。
昭和27年10月	雨天体操場兼講堂が完成する。
11月	創立50周年記念式典を挙行する。
昭和28年10月	男子生徒が共学問題で県教委を不信任とし同盟休校を起こす。
昭和33年7月	北巨摩郡長坂町小荒間に八ヶ岳寮が完成、開設する。
昭和34年1月	独立図書館（同窓会館を含む）が完成する。
昭和35年10月	創立60周年記念式典を繰り上げ挙行する。
昭和37年10月	体育館並びに体育部室竣工。
昭和38年4月	家庭課程の生徒募集を停止する。
昭和39年10月	東京オリンピック開催
昭和45年2月	日本万国博覧会開催
昭和47年3月	定時制課程を廃止する。
5月	沖縄返還
10月	創立70周年記念式典を挙行する。
昭和48年8月	下飯田新校舎の建設に着工する。
昭和49年7月	総合選抜制に移行することが決定。
昭和50年2月	下飯田町288番地に移転する。
（1975）	総合選抜校として発足し、男女共学校となる。
4月	校舎落成竣工式。

我が青春の甲府二高

甲府西高等学校同窓会副会長
羽田 喜久枝
甲府二高17回（昭和40年）卒

PROFILE

昭和21年9月生まれ　高17回生
昭和44年3月　山梨大学学芸学部卒業
同年4月より高校教師として勤務
（担当教科は数学）
趣味　書道　テニス　野菜作り　読書

昭和三十七年四月、山梨県立甲府第二高等学校に入学しました。承知はしていたものの、周りは女子ばかりという環境に戸惑いながら始まった高校生活でしたが、そこは女同士、遠慮なしの楽しいものでした。

多くの先生方がニックネーム（例えば、「カマキリ」「玉ネギ」等々）で呼ばれ、それが又ぴったり。「よくぞ名付けた！」と、先輩方の感性にビックリしたものです。ちなみに、我がクラスの担任は「おすわり（正月のおそなえ餅です）」と呼ばれていました。

当時学校には、八ヶ岳の麓に学校寮があり、夏休みにはいろいろな行事が計画されました。私が参加した宿泊学習会は、大学入試のための勉強会でしたが、自由時間には付近を散策したり、おしゃべりに花を咲かせたり。又、先生方の「いつでも質問に来ていいよ。」と言うやさしい言葉に甘えて、夜中の一時頃、休んでいらっしゃる先生に質問に行って…なんて、今思うと、先生方には色々とご迷惑をおかけしていたであろうことが、たくさんありました。

卒業してから四年後の四月、再び母校の校門をくぐりました。教員としてのスタートを甲府二高から始めることになったからです。高校生の時お世話になった先生方も大勢いらっしゃり、在校生も同窓の先輩として接してくれ、充実した二年間を過ごすことができました。

退職後は、同窓会総会の当番学年として招集があり、それ以来同窓会に関わり、今日に至っています。

このように多くの時を共有してきた甲府二高（甲府西高）ですが、その中でも特に、高校生だった甲府二高での生活は、何ものにも代え難い大切なものです。なつかしく、走馬灯のように思い出が浮かんできます。

甲府二高から甲府西高へと校名が変わり、男女共学となって、益々発展してきた母校ですが、さらなる発展を心よりお祈りしています。

昭和39年7月
八ヶ岳寮の
宿泊学習会において
担任の金子先生と

参加者全員で記念写真

クラス会の後、リニューアルされた東京駅をバックにパチリ！

未来を切り開き、自己を確立するために

1977 ≫ 2012

昭和52年～平成24年

現在の校地で共学、単位制と形を変えながら、進学校としての新しい歩みを始める。

オーストラリア・キララ高校正門での本校留学生

校舎が新築され、生徒会誌は「鳳凰」と名付けられた。（昭和52年度）

アメリカ・ノースカロライナ州・アッシュビル高校で学ぶ本校の海外短期留学生

国際教育振興部設立（昭和54年）

コンピューター室設置（昭和61年2月）

57年10月、創立80周年にあたり、記念式典、日展審査員花里金央氏の作になる記念像「大空」の除幕式、記念講演会などが盛大に催された。

昭和57年10月、創立80周年にあたり記念式典、日展審査員花里金央氏作による記念像「大空」の除幕式、記念講演会などが行われました。また記念事業として八ヶ岳寮研修棟の建設事業が58年6月に竣工。同年、ハンセン病患者救済に尽力した小川正子さんの顕彰碑が同窓会より寄贈され、除幕式が開かれました。

昭和61年のかいじ国体では女子体操部員が出場するなど、部活動も活発に行われ、大きな成果を上げました。

平成元年1月、第一回大学入試センター試験が実施され本校からも多数の生徒が参加、希望進路に向かって挑戦をしました。同4月には学校、地域の多彩な文化活動に資するセミナーハウスとして「鳳凰館」が竣工。

平成4年、創立90周年を迎え、記念式典、講演会、演奏会、展覧会、同窓会より寄贈された「旧校歌碑」の除幕式などが行われました。

歴代校長

第24代
神田 龍夫

第19代
高畑 敏

第25代
加藤 正明

第20代
浅川 宗三

第26代
志村 洸

第21代
渡邉 弘

第27代
三科 嘉徳

第22代
松本 武秀

第28代
足達 輝夫

第23代
川手 千興

平成元年4月、学校、地域の多彩な文化活動に資するセミナーハウスとして鳳凰館が竣工した。

旧校歌碑除幕式（平成4年11月）

本館正面
校章の取り付け工事（平成4年3月）

耐震だけでなく全面的に改修工事が行われた。（平成11年）

平成9年、本校は総合選抜から抜けて、全県下から生徒を募集する全日制単位制高校として生まれ変わりました。初めての推薦入試も行われ、4月には新制度による第一期生319名が晴れて入学しました。この改編によって、生徒の授業選択の幅が広がり、少人数制により生徒の能力、適性がさらに発揮できるようになりました。

平成14年には創立100周年を迎え、記念式典が盛大に執り行われ、さらに16年には同窓会100回記念総会が開催されるなど、本校の歴史と伝統を感じる感慨深い行事が挙行されました。

平成20年「西高ならでは」のステージで思い思いの高校生活をデザインしてほしいとの意味から「n.stage」が誕生しました。

歴代校長

第31代
松土 清

第29代
原 敏彦

第32代
八巻 良一

第30代
滝田 二三雄

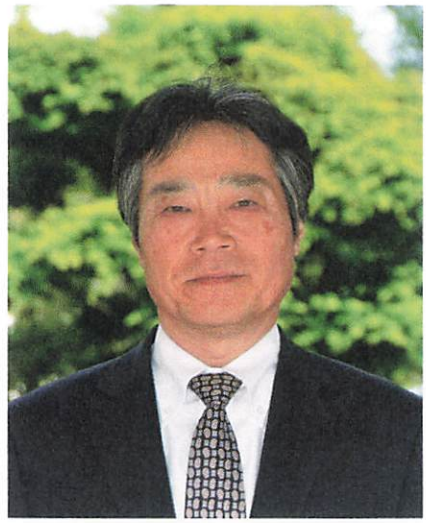
「心豊かな高校教育」外部講師による授業風景

第4回全日本高等学校吹奏楽大会 in 横浜　高吹連理事長賞受賞
ミュージックエイト賞受賞（平成14年8月）

年表

昭和52年4月	山梨県立甲府西高等学校と改称する。
（1977）	屋外プールおよび付属施設が完成する。
昭和56年11月	創立80周年記念像「大空」を建立。
昭和57年2月	校歌碑設置
昭和58年4月	鳳凰章が制定される。甲府昭和高校が加入し、
昭和59年2月	五校選抜入試となる。
平成元年4月	鳳凰館竣工式、祝賀会、記念演奏会
平成4年11月	創立90周年記念式典
平成6年4月	総合選抜制度学校希望制導入。
平成9年4月	全日制単位制高等学校へ改編。
	全県下から生徒を募集する。
平成8年3月	県の単位制高校への改編募集に応募
	することに職員会議で決定。
平成9年	全日制単位制高校へ改編。
	二学期制も導入。校舎全面耐震改修。
平成11年3月	耐震大規模改修完了
5月	八ヶ岳寮廃寮
平成14年	学校創立100周年記念事業
平成16年	ポロシャツ導入
平成17年	県下初の65分5時限授業実施。
平成18年	理数探究クラブ発足・ロゴマーク制定
平成19年	すべての高校が全県一学区制となる。
平成20年	n．stage誕生。
平成21年	体育館床改修・格技場耐震補強
	短期留学先をキャンベルホール・スクール
	（カリフォルニア州）に変更。
平成22年	屋上防水工事
平成24年	110周年記念事業で図書館エアコン改修、
（2012）	自習室整備、学校HP改修。

がんばれ！西高生　くじけるな！西高生



専修学校 山梨予備校 校長
斉木 邦彦
高校30回（昭和53年）卒

PROFILE

高30回生
1959年4月22日生まれ。
1975年4月甲府第二高校入学。1978年3月甲府西高校卒業。東京大学文学部東洋史学科卒業後、県立高校世界史教員に。甲府西高校に教諭として2回、のち教頭、校長として勤務。高校教育課長、総合教育センター所長、教育次長、教育長を務めて退職。現在、専修学校山梨予備校校長。

母校甲府西高校が創立百二十周年を迎えました。心からお祝いと感謝を申し上げます。

私は寿町から下飯田に移転したばかりの校舎で、二年間を二高生、一年間を西高生として過ごし、教員になってからも縁があって四回赴任しました。その間、創立九十周年、百周年、百十周年の節目のときに西高に在職していたのは、たいへんありがたい幸運でした。

いつの勤務もそうですが、なかでも校長として務めた最後の二年間は本当に幸せな日々でした。創立百十五周年記念事業と銘打って「きょうは校長室で昼食会」を生徒諸君の理解と協力を得て各クラス十四、五名が参加、数か月にわたって計二十四回実施しました。

北館校舎の壁面に横断幕の形で、校歌三番後半部「秀づべき学び舎のさまざま生ひ立たす愛の母校よ　偉へなむとこしへかけて甲府なるわが西高」を掲示しました。西高は西高生と西高卒業生を大事にする学校でありたい、との願いを込めてのことでした。

「がんばれ！西高生、くじけるな！西高生」。このフレーズは年次主任の時から使っていました。高校時代は人生で最も多感な時期で、感動的な場面に多く出会う一方、努力してもうまくいかず、つらい思いをすることもたくさんあります。しかしその後の人生で受け止め方が変わります。今は自分を信じてがんばれ、くじけるな、と励ましたかったのです。

校長として全校生徒に話をする際は、自分を信じる、ということについて話しました。自分も知ることのできない未知の自分によって私という存在は支えられている、その力を信じる、ということです。自分をこういうものと限界づけることなく、自分に対して柔軟に、そして大らかに構えてほしいと思いました。

母校西高での経験や思いが温かな記憶となっていつまでも残り、西高で学んだ全ての人たちを生涯応援し続けてほしい、と心から願っています。甲府西高校の益々のご発展をお祈り申し上げます。

下飯田に建設中の新校舎
（男女共学の1期生として入学しました）

「きょうは校長室で昼食会」のひとコマ
（集まってくれた心優しい西高生たちです）

二高から西高に受け継がれた校歌
（「第二高校」が「わが西高」に変わりました）

Be resilient , and go through an unpredictable society

2013 » 2023

平成25年～令和5年

困難の中でも自主性を失わず努力し続ける

甲府西高生

IBのリーフレット
IB生制作の『IB紹介リーフレット』 オープンスクール時に中学生に向けて配布

授業の風景
1人1台端末(BYOD)を使った授業

平成25年、ホームルーム教室にエアコンが設置されました。平成28年6月、本校に国際バカロレア教育を導入することが正式決定されました。平成30年4月、生徒一人ひとりの興味・関心に即した学びへの対応や、論理的思考力や課題解決能力の育成を狙って、「鳳凰学」(総合的な探究の時間の本校における名称)における課題研究論文の指導が全生徒を対象にスタートしました。平成31年4月、国際バカロレア(International Baccalaureate、以後IB)機構により、IBワールドスクールに正式に認定されました。これに合わせて、北館4階に新たに「IBラーニングスペース1」が整備されました。また、課題研究論文を始めとする探究的な学びの更なる発展のために岡本尚也先生をお招きし、今後毎年恒例となる講演会の第1回目を実施しました。令和3年1月、前年度まで実施されていた大学入試センター試験に代わって大学入学共通テストが実施され、本校からも多数の生徒が参加、希望する進路に向かって挑戦しました。4月より

歴代校長

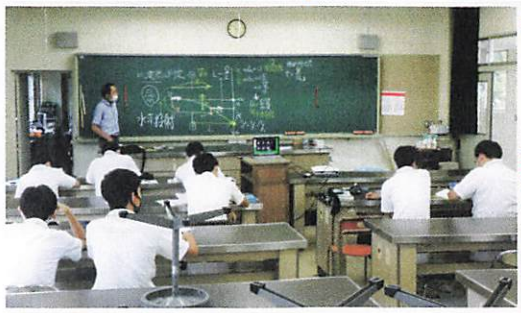
第33代
深沢 幸一

第34代
小川 巌

第35代
斉木 邦彦

第36代
手島 俊樹

第37代
初鹿野 仁



マスクの生徒の写真
約3年間新型コロナ感染症に苦しめられました

検温丸
日課の検温報告が簡単に！
本校生徒が「検温丸」を開発

ＩＢフルディプロマのカリキュラムが本格的に開始し、世界水準の新たな学びがスタートしました。5月には、ＩＢの手法を生かした課題研究論文の取り組みなどから、三菱みらい育成財団のプロジェクトに参加することが決定しました。令和4年、ＩＢの更なる豊かな学びのために、南館4階に「ＩＢラーニングスペース2」が整備されました。三菱みらい育成財団のプロジェクトの一環で、3月には生物学者の福岡伸一氏の講演、10月には漫画家の山崎マリ氏の講演が行われていました。著名な人物による示唆に富む講演を、生徒は目を輝かせて聴いていました。令和5年10月、本校創立１２０周年を記念した記念式典が盛大に執り行われ、ジャーナリストとして著名な池上彰氏の講演も行われました。１２０周年記念事業として、化学実験室と選択教室3室と書道室にエアコンが設置されました。（化学実験室と選択教室3室は前倒しで設置）。また、北館3階に、新たな学びのスペースとして「ラーニングスペース１２０」も整備されました。

歴代校長

第38代
高見澤 圭一

TOKとは…
Theory of knowledge（知の理論）　身の回りに幾多存在する答えのない疑問について議論していく授業。自分の周りに溢れる疑問について明解な答えは出なくても、考えて考えて考えることで人生の価値がより深くて大きくなったことを感じます。社会に対する関心も高くなりました。言葉の定義づけが非常に大切で、普段使っている言葉の曖昧さを実感させられます。例えば、「言語」とは何なのか、動物が話す言葉も言語に含まれるのか。「歴史」はどこまでの範囲のことなのか、過去との違いは何か…等。「事実」と「真実」など似ているようで異なる言葉を自身で定義し、違いを明確化したことで少しの言葉の違いにも敏感に、使い分けることができるようになりました。どのように知識や価値観は形成されるのかを知り、自分自身の価値観のルーツを知ったことでバイアスをなくし、より客観的な考察ができるようになりました。（生徒の声から）

CASとは…
・Creativity（創造的活動）Activity（身体的活動）Service（奉仕的活動）の各分野で、関心がある活動を自分で計画して行う体験的な学習。中学生に西高とIBを知ってほしいという思いから、学校紹介動画制作も企画しました。自分と向き合い、仲間と協力して、新しいことに挑戦し、一歩を踏み出す力が大切だと学びました。また誰かのために役に立てるような「真のニーズ」に応える企画を立てて実行したいです。（生徒の声から）

年表

平成25年4月　女子制服改定
（2013）
平成31年4月　国際バカロレア認定校となる
令和3年4月　国際バカロレア　ディプロマプログラム開始
令和5年　120周年事業で
（2023）
・選択教室・化学実験室エアコン設置（R2）
・清掃用ポリッシャー購入（R2）
・書道室にエアコン設置（R5）
・ラーニングスペースの整備（R5）

石原 敬彦さん
総合選抜1期生　現同窓会長

小林 美佐代さん
甲府第二高等学校第3回卒業生

手島 俊樹さん
総合選抜3期生　IB導入時の校長

同窓生座談会

輝ける120年の歴史を未来へつなぐ

明治35年5月に山梨県立山梨県高等女学校として開校して以来、120年にわたる歴史を紡いできた甲府西高校。その長い年月のなかでは、いくつもの転機がありました。

今回は、その節目節目を知る方々にお集まりいただき、それぞれの心の中、思い出の中にある母校の姿を通して歴史を振り返るとともに、次の世代に向けた思いも存分に語っていただきました。

姫野 爽士さん
現生徒会長

清水 美保子さん
IB1期生

長谷川 拓さん
単位制卒業生　現西高教諭

同窓生座談会の座長を務めた、高見澤校長

母校 それぞれの思い出

高見澤：まずは自己紹介を兼ねて、在学時の学校の様子や思い出などをお話しください。

小林：太平洋戦争の真っただ中にあった1945年に、小学校を卒業して甲府高等女学校（以下甲府高女）に進みました。戦況は悪化していて、食べるものも着るものも満足にありませんでしたが、憧れの甲府高女に入学できてとても嬉しかったですね。

8月に終戦を迎えると、世の中がどんどん変わっていきました。学校の制度も現在の6・3・3制になり、甲府高女は甲府第二高等学校（以下甲府二高）になりました。私は併設中学の生徒として3年間学んだ後甲府二高の1年生になり、卒業したのは1951年の3月でした。

石原：私が入学した1975年に甲府二高は共学になり、校舎も寿町から現在地に移転しました。入学式当日、ピカピカの新校舎を見て感激したことを今も鮮明に覚えています。

思い出されるのは、先生方が情熱を持って学習指導をしてくださったことです。私は、後に甲府西高校（以下西高）の校長になる斉木邦彦君と学区外から来ていたのですが、先生方が7時半には職員室にいらしていたので、朝早く登校して2人で質問に行ったものです。夏休みに八ヶ岳寮で林間学校があると聞き、楽しい響きに魅かれて参加したら勉強合宿だったこともありました。

生徒会長を務めたことも良い思い出です。全校生徒にどんな文化祭をしたいかと問いかけたところ『模擬店をやりたい』という意見が多かったので、何度も何度もお願いに行き、実現しました。それが今も続いていると聞いてとても嬉しく思います。

手島：1977年に我々が入学し、全学年が共学になると同時に校名も改められました。実は、合格発表のときは甲府二高だったのに、最初のホームルームのときに校内放送で生徒手帳の校歌のページを開くようにと指示があり、「この4月から本校は甲府西高校に変わります。校歌の歌詞も『甲府なる第二高校』から『甲府なる我が西高』に変更しますので、訂正してください」と。ちょっと珍しい経験ですよね。

中学校との違いも感じました。入学してすぐ開催された生徒総会で、校名変更の是非について忌憚のない意見が交わされる様子に衝撃を受けましたし、「強歩大会を実施するかしないか」といったことも生徒総会で議論した記憶があります。先輩方の姿からは、自分たちなりの西高像を作っていきたいという気概を感じられ、先生方にも、自分事として生徒たちに考えさせるという雰囲気があったように思います。そして、そういうものが脈々と受け継がれ、自由な校風となって今につながっているんじゃないかということを、校長として戻ってきたときに感じました。

高見澤：こちらが、石原さんと手島さんが在籍されていた頃の西高の写真ですが、周囲には何もなく、本当に田んぼの真ん中に新築の校舎だけが立っていたのですね。

石原：懐かしいですね。当時はグラウンドが整備されておらず、体育の時間と言えば石拾いが定番でした。

長谷川：私が入学したのは2007

年で、総合選抜から全県一区に変わった年でした、入試自体が前年と大きく変わるという不安の中で高校受験を迎えたことを覚えています。

西高は勉強が大変だと聞いてはいましたが、入学してみると想像を超えていて…。一方で、先生方は、勉強が全てではないということも折に触れて伝えてくださいました。バスケットボール部に所属する私にも、「部活動も、行事も、勉強も、全力で楽しもうな」といった温かい励ましの言葉をかけ続けていただいた3年間だったなと、今改めて思います。

その後教員になり、本年4月、西高に赴任しました。母校に勤務する機会はなかなかないので、幸せを感じながら、在学中に指導していただいたことを少しでも生徒に伝えられるよう頑張っています。

清水：2020年に入学しました。インターナショナルバカロレア（以下IB）のフルディプロマプログラムを選択した1期生になります。ちょうどコロナ渦に重なった世代で、入学式はなく通常の登校は7月から。さらに、卒業するまでマスク生活が続きました。そして、そうした状況にあっても、いかにして青春するかを模索しながら前を向き、部活も、生徒会活動も、行事も、鳳凰祭でのバンドも、やりたいことはすべてやった充実の3年間になりました。

今春横浜市立大学に進学し、現在はマスクなしの大学生活を全力で楽しんでいます。

姫野：2021年に入学し、現在、生徒会長を務めています。僕たちの世代は中学3年になるタイミングでコロナ禍が始まり、入学後も、鳳凰祭は2日間YCC文化ホールという異例の開催、夏休みも部活動や課外活動はなく家に籠って生活するしかないという辛い高校生活を送りました。また、西高は自由な校風で、本来なら行事など自由に企画できる部分が多いのですが、感染防止が徹底される学校生活のなか、生徒会も、コロナ禍の中で最大限どのような活動に取り組むことができるかということを考え、活動することを余儀なくされてきました。

今年になってほぼ平常に戻り、鳳凰祭でも模擬店や一般公開が実施できました。ようやく憧れの高校生活を楽しむことができています。

甲府高女から西高へ

高見澤：改めて小林さんにお聞きしたいのですが、女子校時代はどんな学校で、どんな学校生活を送っていらしたのでしょう。

小林：私は戦時下での入学でしたので、教科の勉強ではなく、負傷

者を手当するための包帯の巻き方や三角巾の使い方、手旗信号やモールス信号を学ぶ日々でした。7月の甲府大空襲で校舎が焼失したものの、夏休み中に終戦を迎えたので、二学期からは83部隊の兵舎や憲兵場で勉強しました。身一つで戦火を逃れた人もいて服装はバラバラ。椅子も机もないので、小さな座布団を椅子替わりに画板を机替わりに持参しました。ところがその兵舎も1947年1月の失火で全焼してしまい、私たち三回生は甲府一高の講堂へ通うことになりました。しばらくして現在のYCC文化ホールの場所に校舎ができ、ようやく全校生徒が一同に集まって勉強できるようになったときは、本当に嬉しかったですね。南校舎と北校舎をつなぐ渡り廊下にガス台や調理台を持ち出して調理実習をしたり、校庭は焼け出された人のためのバラックで埋め尽くされていたので中庭で体育をやったり…。高校では、陸上、バスケット、バレー、テニス、演劇などの部活動も始まりました。激動の時代でしたが、みんな明るく健気でしたね。

なかでも思い出深いのが卒業式です。式後の謝恩会でクラス毎に出し物をすることになり、私たちは「チルチルミチル」という演劇をしました。童話の「青い鳥」にアレンジを加えて実際の学校の様子を盛り込み、先生方には名前ではなくあだ名でご登場いただいたところ、会場が大きく沸いて、しばらく伝説になりました。

2度の修学旅行も忘れられません。入学したのは女学校だったので、4年の過程を終えて卒業する方がいらしたんですね。それで、高校1年の時に日光東照宮と中禅寺湖へ行き、3年の時には京都・奈良への2回目の修学旅行に行きました。夜行列車に乗って、みんなではしゃいで、今思い出してもわくわくします。

高見澤：そんな女子校時代を経て1975年に共学になるわけですが、当時の様子はどうだったのでしょう。

石原：校舎が新しくなっていて設備的な問題もありませんでしたし、総合選抜で生徒数も男女同数でのスタートでしたので、女子校に入ったという印象はありませんでした。個人差はあるかもしれませんが、私は甲府二高に合格して嬉しいという気持ちが強かったですね。

手島：私も、女子校の名残りはほとんど感じませんでした。唯一印象に残っているのが応援練習で、団長は男子でしたが、袴姿にたすき掛けをした女子の団員が何人もいらして、凛々しく指導されていました。私など一人残され屋上で校歌を歌わされたのですが、すごくかっこよかったですね。

石原：僕の時には応援団長も女子でした。すごく怖くて、今でもお名前を憶えているほどです。二高は総体でも優勝する強豪校でしたから、その流れでしょうか、女子もごく自然に応援団に入団していました。応援団は憧れの存在であり、ステータスだったんだと思います。

小林：実は私、共学になると聞いたときに、女子校に強制的に入れられるなんて不本意だろうと、すごく心配だったのですね。でも、今のお話を聞いて安心しました。

手島：それまでの女子校を引き継ぐというより、新しい学校としてやっていこうという気概が強かったので、抵抗を感じる生徒は少なかったと思いますよ。

高見澤：母校が共学になることに対してはどのように思われましたか？

小林：羨ましいと思いました。早く生まれすぎたと（笑）。女性と男性では視点が違いますから、男女が机を並べて勉強できるのは良いことだと思いました。一方で、校名変更には憤りを感じました。二高になったときには、なんで私たちが二なんだ、一じゃないのかと怒りを覚えたんですけれど、西高になるときには二高という校名を残したいという気持ちになっていて、なぜ卒業生にも聞いてくれないんだと。

石原：そのことなんですけどね、二高から西高に変わる半年程前、生徒会に、全校生徒にアンケートを取って欲しいという話があり実施したんです。そうしたら、二高のままの方がいいという意見が多かった。学校としても、校名を残したかったのではないかと思うんですよ。ところが正式発表されたのは西高への改名だったので、生徒総会が開催されることになった。なので、先ほど手島さんのお話に出てきた生徒総会は、「校名変更の是非を問う」と言いながら、実は抗議の集会だったんです。残念ながら決定を覆すことはできませんでしたけれどね。

手島：当時の生徒には、名前は二高だけど、我々の方が中身はしっかりとしているということを自分たちが示せばいいんだといった気持ちがあったんじゃないかと思うんですよ。当時の私は、生徒総会での議論を聞きながらそういう気風のようなものを感じて、生意気にも素敵な生徒集団だと思ったものです。

単位制への移行、そして県下初の公立ＩＢ校へ

高見澤：１９９６年には、単位制に移行しました。

手島：単位制が西高にもたらした利点の一つが、全県一学区での生徒募集により学力層が均一になったことです。当時は学力差を考慮した習熟度別クラス編制が一般的でしたが、意識差という弊害も生まれていました。その点、西高はフラットになったおかげで一つの集団という意識が醸成され、いろいろな生徒が脚光を浴びることができる状態で学校生活を送れるようになった。これは、単位制がもたらした良い影響の一つだと思いますね。

高見澤：そして２０２０年には県下初の公立ＩＢ校となります。

手島：設置は県の教育施策の一環ですが、ちょうど認定を受けた時期に校長として赴任したために準備を担うことになりました。当時最も頭を悩ませたのが、どうすれば西高らしくできるかということでした。ＩＢには素晴らしい理念があるもののそのまま実施するのは難しいため、導入検討委員会の先生方と全国のＩＢ校を視察し、西高に合ったＩＢのやり方を模索しました。また、本校の生徒や中学生に、いかにしてＩＢを理解してもらうかも大きな課題でした。今日、無事ディプロマを取得して立派に大学で活躍している一期生と会うことができ、安心するとともに、この輪がどんどん広がっていけばいいな、そういう発信をぜひ卒業生にしていって欲しいなと、そんな願いも持ちました。

高見澤：清水さんはＩＢの一期生ですね。

清水：はい。私は中学２年生のときにＩＢの存在を知り、英語が好きだったこともありぜひ学んでみたいと思っていました。ただ、今思うと当初の理解はあまりに希薄

で、「英語を勉強をして国際問題について学ぶ」程度の漠然としたイメージで始めてしまったために、最初は、ディスカッション形式の授業にも、先生が問いかける抽象的な課題に対して自分なりの答えを導き出していくという学びのスタイルにも戸惑いましたし、相談する先輩もいなかったので、一緒に受けていた4人で「これでいいのかな」と確認し合う日々でした。一方で、1期生として何としてもディプロマを取得しなければという思いは強く、仲間と励まし合いながらひたすら頑張った2年間だったように思います。

高見澤：学びについてはどうでしょう？

清水：より幅広く、深い学びができたと感じています。IBでは、国際問題や環境問題をその渦中にいるという認識で勉強しますし、当然のこととして捉えられている事柄も、常に別の視点から見て、本当に正しいのか、別の糸口はないのかと検討します。そういう新しい視点での学習がとても楽しくて、貴重な学びを得ることができました。そして今大学でも、常に批判的思考を持ち主体的に講義に臨むことができています。

高見澤：学びの内容というよりも、学び方、見方、考え方が身に付いたと。そういった意味では、新しい指導要領はかなりIB寄りになっていますね。

手島：ええ、方向性としては全く同じです。もともとは、国民の識字率を挙げるというような目標のもとで画一的な教育を行ってきたのだと思いますが、現代の成熟した社会では、学び方のルートは一本ではないんですよね。私は、IBのディスカッション的な学びがこれまでの日本の教育法より優れているとは思いませんが、それぞれに良さがあるわけですから、選べる環境を作っていることが西高の魅力の一つになっていってくれたらと思います。

高見澤：今、西高では、IBの手法を取り入れた学びも実践していて、その一つが、総合的な探究の時間の課題論文研究になります。姫野君は体験してどう感じますか？

姫野：課題論文研究は、自分が研究したいテーマを探し、研究するという授業ですが、みんなテーマ設定の段階でまずは苦労しています。でも、社会に目を向けたり自分なりの観点で考えたりする機会になり、能動的な学びが得られるので、非常に身になっていると感じています。

高見澤：先日の発表会では、よくこれだけ多面的・多角的に課題研究ができるものだと感心したのですが、実際に指導しておられる長谷川さんは、どのように思われていますか？

長谷川：例えば調査をする場合、学内のシステムを使って生徒や教職員に問いかけることもできるのですが、なかには、外部の関係機関に協力を仰ぐなどより広い調査を試みたり、分析段階でも幅広い角度から考察したりと、視野が広がるような取り組みをしている生徒もいます。私自身勉強になる内容もあり、正直驚きました。

高見澤：素晴らしい取り組みだと思うのですが、実はそれを仕掛けたのは手島さんです。よい機会な

ので、課題探究活動を西高のもうひとつの柱に据えていこうというお考えについて、少しお聞かせいただけたらと思うのですが。

手島：ＩＢにはＴＯＫという独特な教科活動があり、批判的思考の育成も重要視されます。当時、西高の生徒を見ていて、素直で真面目で優しい子が多いからこそ、少々批判的な視点から見るという姿勢も学ばせる必要があるんじゃないか、ＩＢのＴＯＫを参考に課題探究的な活動に取り組ませることが、一人ひとりの将来の成長につながっていくんじゃないかと思い至りました。

それからもうひとつ、失敗を経験するべきだと。高校生の段階でみんながみんな立派な論文を書けるわけがなく、いろんな反省や後悔が出てくるはずなんです。それが、次のステップで深い探究に挑むことにつながっていくんじゃないかという期待もあります。

実は私も先日の発表会を拝見したのですが、いろいろな意味で感心しました。ただ、あそこで発表することがゴールではないので、ぜひ3年生の皆さんには、今回取り組んだ研究を今後に生かして欲しいなと思っています。

西高へのメッセージ

高見澤：最後に、これからの西高へのメッセージを頂きたいと思います。

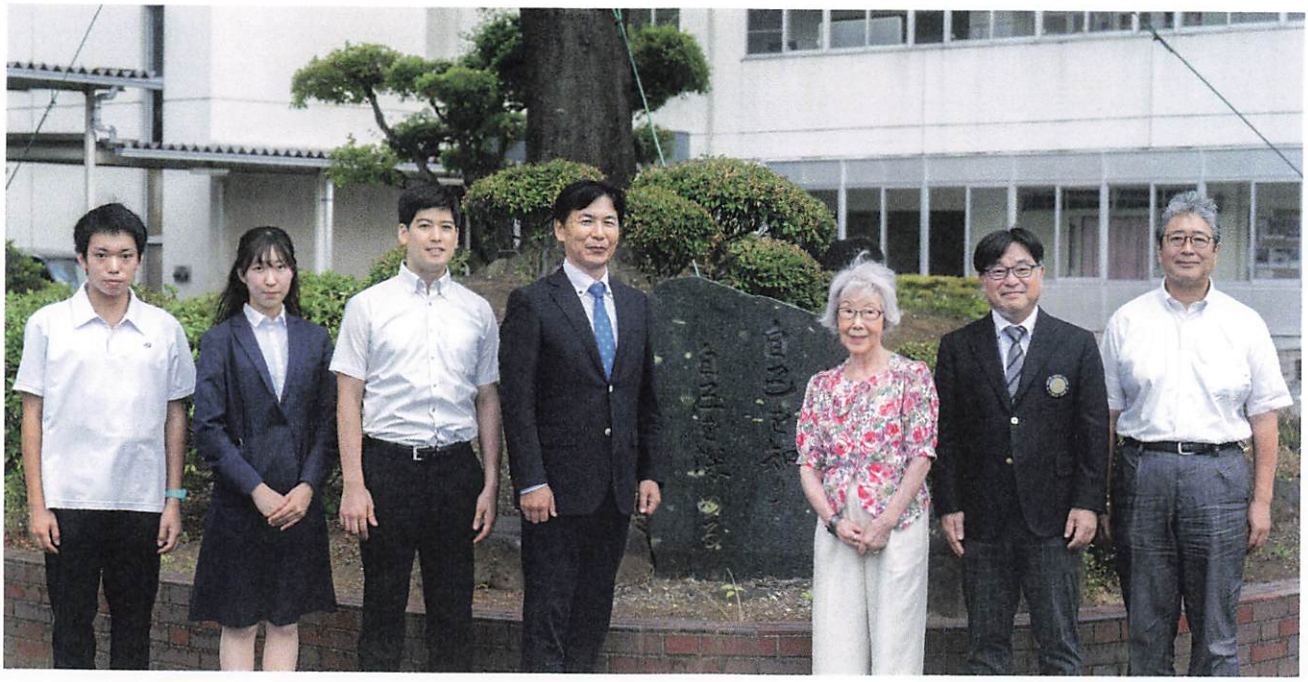
小林：私には、世界に目を向けていればあのような戦争は起こらなかったのではないかという忸怩たる思いがあり、生徒さんたちにも、世界に目を向けて、日本が今どういう立場にあるか、どのくらいの力があるのか、といったことを知ってほしいと思っていましたが、今はとても良い授業をしておられるのですね。お話を伺いながら、すごく頼もしいなと、嬉しい思いでいっぱいになりました。

それから、ものすごい勢いで進化するＩＴに遅れないような勉強をすると同時に、倫理観を育んで欲しいとも思います。昨今、ＳＮＳ上での誹謗中傷が社会問題になっていますが、人として大事なものは時代を経ても変わらないので、これからも大事にしていって欲しいですね。

石原：以前、同窓会の集まりで、小林さんが「真の青春とは、若き肉体のなかにあるのではなく、若き精神のなかにこそある」というサミュエル・ウルマンの名言を引用したご挨拶をされ、とても感動したことがありました。西高には、小林さんのように、品格があり、教養もあって、人としての優しさに溢れた先輩がたくさんおられますので、一人でも多く出会い、その姿を引き継いでいって欲しいと思います。それから、僕は中学校の英語教師でしたが、英語の学習法を勉強したくて教員になってから2回海外へ出たことがあります。そこで痛感したのは、自分で考える力、自分の考えを構築する力の必要性です。今は日本の教育もそういう方向になってきてはいますが、西高にはぜひ思考力、判断力、表現力を育むトップリーダーとなっていただきたいなと思います。応援しています。

手島：今日の小林さんのお話もそうですが、私は沖縄のひめゆりの塔へ行ったときに、これを山梨県に置き換えると甲府高女の先輩方の姿なんじゃないかと感じました。それも含め、西高は他の学校にはない歴史のもとに成り立っている学校なのだから、そういった部分を大事にした教育をこれからも続けていただきたいと思います。

それから、人生１００年時代と言われる今、物理的に考えると、高校時代は人生のわずか３％ということになるんですね。でも、実際に



はその人にとって多大な影響を与える非常に重要な3年間であり、人間形成においてかなりのパーセンテージを占める大切な時間なんじゃないかと思うんです。だからこそ、後輩諸君には、勇気を持っていろいろなことに積極的にチャレンジして自分を伸ばしてほしいし、西高には、そういった生徒を応援できる学校、人生の40～50％は西高時代に築かれたと言われるような3年間を過ごせる学校であってほしいと思います。頑張ってください！

長谷川：高校時代の友人は一生物などと言いますが、実際、私が頻繁に交流を続けている友人の多くは高校時代に出会った人たちです。生徒の皆さんにも、今、一緒に生活している友人たちと良い思い出をたくさん作り、友情をはぐくんで欲しいと思います。それから、勉強も大事ですが、まずは自分が健康でいられるように。肉体的にも精神的にも充実した3年間を過ごし、卒業後も西高で良かったと思ってもらえたら嬉しいですね。

清水：世の中には明確な答えのない課題がたくさんあります。そうした問題を他人事にせず、自分なりの解決策を見つけていこうとする姿勢を在学中に育んで欲しいなと思います。それから、自分の意見を持つこと、その意見を発信することは大事ですが、それには、安心して発信できる環境があることも重要です。その環境が西高にはあると思うので、ぜひこれからも、発信できる人材と同時に、発信を受け入れる人材も育てていただけたらと思います。

姫野：今日は先輩方のいろいろなお話を伺いながら、学ぼうとすればいつでも学べる環境にあることは、すごく恵まれたことなのだと実感しました。また、これから先を生きるために必要な力を養える場も整っている西高はやっぱりすごいなと、改めて思いました。僕たちの世代はコロナ渦で思うようにいかないことも多かったのですが、今は制限がなくなり、学びたいことを存分に学べる環境になっているので、後輩には、果敢に、能動的に、学びを深めていって欲しいと思うと同時に、自分もその姿勢を崩さず、能動的に学んでいきたいと思います。

高見澤：先輩方が連綿と培ってこられた西高ならではの品格を受け継ぎ、全ての生徒が深く重みのある3年間を過ごせるよう、また新たな甲府西高校の歴史を紡いでいきたいと思います。本日はありがとうございました。

Kofu Nishi
High School
n·stage で
西高を振り返る

2013

2013の出来事

- 6月22日 -「富士山-信仰の対象と芸術の源泉」がユネスコの世界文化遺産に登録
- 8月10日 - 甲府市で日本国内史上4位(当時)となる40.7度を記録
- 8月29日 - JRリニア山梨実験線の全線開通
- 9月7日 IOC総会において、2020年夏季オリンピックの開催都市が日本の東京に決定
- 12月4日 - ユネスコ政府間委員会で、『和食ー日本人の伝統的な食文化』が無形文化遺産に登録

流行語

お・も・て・な・し
今でしょ!
じぇじぇじぇ
倍返し
アベノミクス
ご当地キャラ
特定秘密保護法
PM2.5
ブラック企業

山梨県立甲府西高等学校の記録

4月

38年ぶりに女子の制服がリニューアルされ、新しい制服を身にまとった1年次生が入学してきた。上着にはNに鳳凰の羽をデザインした刺繍が入り、リボンもえらべるようになった。また、評判の芳しくなかった体育着も新入生から一新された。

5月

第65回高校総体にて陸上部、剣道部個人、体操部団体が関東大会出場を決め、男子16位女子28位となる。バスケットボール部男子3位。

6月

西美展国文祭スペシャル(第50回記念展)が6月7～13日まで県立美術館にて開催された。今年は記念展ということもあり、本校収蔵作品27作品を含む、会員31、顧問4、生徒18名、計97作品が展示された。

7月

水泳、剣道、陸上、体操女子が関東大会に出場。放送部はNHK杯全国高校放送コンテスト創作テレビドラマ部門に参加。

8月

「長崎しおかぜ総文祭」に美術部の千野さん清水さん保坂さん、文芸部の長田さん、新聞部の鈴木さん坂本さん、将棋部の石川さんの7名が参加した。

10月

野球部1年生大会、決勝戦で東海大甲府高校に敗れたものの終盤に同点に追いつくなど粘りを見せての準優勝となった。

11月

第31回山梨県高等学校芸術文化祭において、囲碁将棋部の男子団体・個人で芸術文化祭賞を受賞。また、美術部窪松さんがポスター部門、茶道部の半田さんが茶道体験作文で最優秀賞を受賞した。

2014の出来事

- 2月14日 - 甲府市で114cmの積雪を観測
- 4月1日 - 消費税が5%から8%へ増税された
- 10月6日 - 青色ダイオードの発明によりノーベル物理学賞が赤﨑勇・天野浩・中村修二の3人に決定した
- 12月3日 – 小惑星探査機はやぶさ2が種子島宇宙センターから打ち上げられた
- 12月17日 - リニア中央新幹線の安全祈願式が品川駅と名古屋駅で行われ、建設が開始された

流行語

ダメよ～ダメダメ
集団的自衛権
ありのままで
カープ女子
壁ドン
ごきげんよう
マタハラ
妖怪ウォッチ
レジェンド

山梨県立甲府西高等学校の記録

4月 本年度入学の1年次生より6クラス240名定員になった。

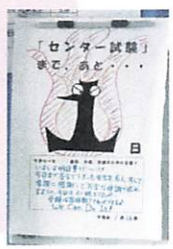
5月 第66回総合体育大会が行われ、陸上部、体操部が関東大会出場を決めた。
また、水泳部が男女ともに個人種目で優勝、バスケットボール部男子は3位という成績を収めた。

6月 吹奏楽部が山梨県吹奏楽コンクール高校Aの部で金賞を受賞、西関東吹奏楽コンクールへの出場を決めた。

7月 放送部がNHK杯金国放送コンテスト山梨県大会の創作テレビドラマ部門で、第1位を受賞。作品の一部は、NHKのニュースでも取り上げられた。

10月 全国高校選抜優勝大会（ウインターカップ）山梨県大会で、男子バスケットボール部が準優勝。また、女子は目指していたベスト4に10年ぶりに入り、3位に。

11月 第32回山梨県高等学校芸術文化祭において、吹奏楽部、囲碁将棋部の男子団体・女子個人山中さん、美術部久保さん、演劇部が芸術文化祭賞を受賞。また、この年は2年生の田上さんがポスター部門で最優秀賞を受賞し、ポスターに採用された。



2015の出来事

- 3月14日 - 富士急行線全18駅でSuica導入
- 7月1日 - 閏秒が適用され、日本標準時では8時59分59秒と9時00分00秒の間に8時59分60秒が追加される
- 10月5日 - ノーベル生理学・医学賞 に韮崎市出身の大村智博士が選ばれた
- 10月31日 - 圏央道が東名高速道路から東北自動車道までつながる
- 12月31日 – 原子番号113番元素の発見者が日本の理化学研究所であることが認められ、命名権を獲得

流行語

爆買い
トリプルスリー
安倍政治を許さない
安心して下さい、穿いてますよ
一億総活躍社会
エンブレム（問題）
五郎丸（ポーズ）
SEALDs
ドローン

山梨県立甲府西高等学校の記録

4月

1学年が7クラスある最後の年度となる。(学園祭の縦割りブロックが大変だった。学園祭と言えば、2日目エンディングで事件が…)

5月

第67回総合体育大会。

·陸上部

［関東大会出場］110mハードル 飯島 一貴　棒高跳び 奥田 雅也
400m 鰻池 琴美
4×100mリレー 上条 淳夏·白鳥 舞子·若林 花蓮·鰻池 琴美
4×400mリレー 若林 花蓮·保坂 光里·白鳥 舞子·鰻池 琴美

·体操部

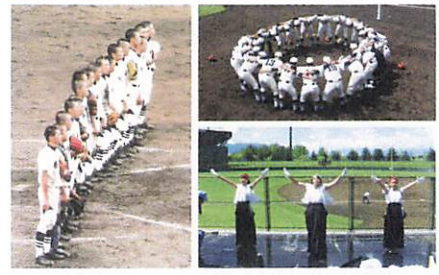
［関東大会出場］保阪 日南子

·水泳部

［関東大会出場］200m自由形 優勝 田切 和也
400m自由形 優勝 田切 和也
100m平泳ぎ 準優勝 宮川 真穂
50m平泳ぎ 準優勝 宮川 真穂
50m平泳ぎ 3 位 森澤 由

7月

全国高等学校野球選手権大会山梨大会において野球部が20年ぶりのベスト8!。全校応援体制で頑張った。



8月

2015滋賀琵琶湖総文祭に吹奏楽部·美術部の久保翔さんが参加。久保さんは奨励賞を受賞した。

11月

第32回山梨県高等学校芸術文化祭において、

·吹奏楽部　芸術文化祭賞
·美術部　優秀賞 望月友新
·茶道部　優秀賞
·音楽部　優秀賞
·囲碁将棋部　囲碁部門 2位 団体（前島永幸·小林凜·小林天）、
囲碁部門 2位 前島永幸
·放送部　朗読部門 芸術文化祭賞 新田佳永、Audio Picture部門 優秀賞
·文芸部　小説部門 芸術文化祭賞 青柳百音
短歌部門 芸術文化祭賞 伊藤奏絵
児童文学部門 優秀賞 根岸茜里、俳句部門 優秀賞 斉木香穂
·新聞部　優秀賞
·国語科　俳句部門 優秀賞 小林蒼一朗、随筆部門 優秀賞 中沢芽伊

2016の出来事

- 1月-マイナンバー制度が開始
- 4月14・16日 - 熊本で震度7の地震が発生
- 5月26・27日 - 主要国首脳会議（G7サミット）が三重県の伊勢志摩で開催
- 6月22日 – 18歳選挙権が施行
- 8月 – リオデジャネイロオリンピック・パラリンピック開催
- 10月3日 – ノーベル生理学・医学賞を大隈良典氏がオートファジーの研究で受賞
- 11月8日 – アメリカ合衆国大統領にトランプ氏が当選

流行語

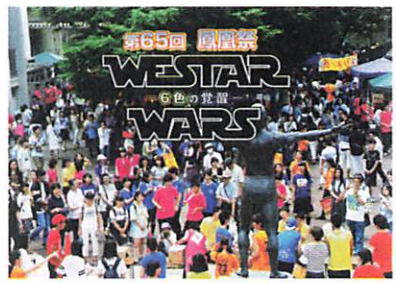
神ってる
聖地巡礼
トランプ現象
マイナス金利
盛り土
ポケモン GO
アモーレ
PPAP

山梨県立甲府西高等学校の記録

4月 全年次6クラス編成となり、全校生徒約720人となった。

5月 第68回総合体育大会が行われ、陸上部、体操部が関東大会出場を決めた。また、水泳部の田切さんが400m・200mの自由形で優勝、バスケットボール部男子は3位という成績を収めた。

6月 第65回の鳳凰祭が開催される。本年度より2年次の発表が文化ホールになった。（閉祭式での縦ノリも禁止された）



7月 放送部がNHK杯全国高校放送コンテストで、テレビドキュメント部門・創作テレビドラマ部門が1位、アナウンス部門で田中さん、朗読部門で新田さん・中澤さんが入賞し全国大会に参加。部長の新田さんは朗読部門で全国上位60名に入る。

8月 「2016ひろしま総文祭」に放送部の新田さん、新聞部の坂本さん上野さん、文芸部の青柳さん、囲碁部の前島さん望月さん、将棋部の山内さんの7名が参加した。音楽部は全日本合唱コンクール山梨大会で金賞を受賞し、関東大会に出場した。水泳部の田切さんはインターハイ・国体に出場した。

9月 男子バスケットボール部1年生大会、決勝戦で甲府昭和高校に69対31と快勝し、優勝。

11月 関東高校駅伝群馬大会に、陸上女子1年天野さん、佐野さん、矢崎さん2年清水さん、宮崎さんの5人で初出場。県大会の記録を大幅に更新した。

山梨県高等学校芸術文化祭において、吹奏楽部、文芸部小説の部で青柳さん、同じく詩の部で望月さんが芸術文化祭賞を受賞。また、写真部の佐野さん、放送部朗読部門で中沢さんが優秀賞を受賞しH29年のみやぎ総文祭に出場が決定した。

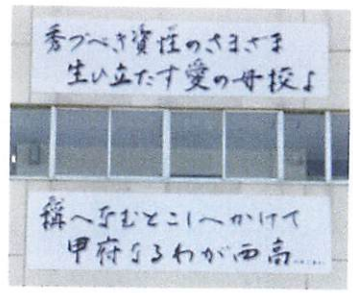
2017の出来事

- 3月3日 - 任天堂が新型ゲーム機「NintendoSwitch」を発売
- 6月12日 - 上野動物園でパンダ「シャンシャン」が誕生
- 6月26日 - 将棋の藤井4段が29連勝、最多連勝記録を30年ぶりに更新
- 10月5日 – 日系イギリス人のカズオ・イシグロ氏がノーベル文学賞を受賞
- 11月14日 – 地質年代に初の日本名「チバニアン」が“内定”

流行語

インスタ映え
忖度
35 億
Jアラート
ひふみん
フェイクニュース
プレミアムフライデー
○○ファースト

山梨県立甲府西高等学校の記録



3月 甲府西高校は、西高生と西高卒業生をいつまでも応援し続ける学校でありたいとの思い、北館校舎の壁面に、本校校歌三番の後半の歌詞『称へなむとこしへかけて「甲府なるわが西高」』が横断幕の形で掲げられる。

5月 第69回総合体育大会が行われ、本校運動部が16種目に出場。支えてくれた家族への感謝、仲間との絆を胸に練習の成果を発揮し、陸上部、体操部、山岳部が関東大会出場を決めた。体操部渡邉さん、水泳部の田切さんは山形県で行われるインターハイにも出場を決めた。

6月 第66回鳳凰祭「西ほうレベルで盛り上がってる!?」が開催され、2000名を超える来場者が来校された。

7月 n·stageが創刊50号を迎える。

8月 「H29みやぎ総文祭」に吹奏楽部、文芸部の青柳さん、写真部の佐野さん、放送部の中沢さんの4名が参加した。

9月 男子バスケットボール部1年生大会で優勝し、2連覇を達成した。

11月 高校文化部の祭典「芸術文化祭」が11月に開催された。西高から16部門に159名の生徒が参加し、4つの芸術文化祭賞と美術工芸・放送・新聞の3部門で来年度の全国大会への切符を手にした。

芸術文化祭賞
文芸部 小説の部 青柳さん、詩の部 西田さん
放送部 アナウンス部門 深沢さん、ビデオメッセージ部門
全国大会参加 美術部 坂本さん、新聞部

2018の出来事

- 5月19日 - カンヌ国際映画祭で、「万引き家族」が、パルムドールを受賞。
- 6月17日 - ルマン24時間耐久レースで、トヨタ勢が初の総合優勝。中嶋一貴は初の日本車による日本人優勝ドライバーに。
- 6月27日 - 小惑星探査機「はやぶさ2」が地球から約3億キロ・メートル離れた小惑星リュウグウに到着。
- 9月8日 – テニスの全米オープン女子シングルスで8日、大坂なおみが優勝
- 10月1日 – ノーベル生理学・医学賞に京都大の本庶佑特別教授が選ばれた。
- 10月11日 – 東京・豊洲市場が開場した。築地市場は83年の歴史に幕を下ろした。

流行語

そだねー
eスポーツ
（大迫）半端ないって
おっさんずラブ
災害級の暑さ
スーパーボランティア
ボーっと生きてんじゃねーよ！
#MeToo

山梨県立甲府西高等学校の記録

4月

春の青空の下、4月7日新入生241名が新たに仲間入りしました。

5月

第70回総合体育大会が行われた。陸上部は学校対抗で4位に入り、12種目で計20名が関東大会出場を決めた。関東大会では功刀さんが男子8種競技で6位入賞を果たした。また、バスケットボール（男子）、卓球部（女子）、体操部も関東大会へ出場した。

6月

第67回鳳凰祭「止まらねぇ西春67騒ぎ」が行われた。

8月

「信州総文祭」に音楽部、新聞部、囲碁部の望月さん、美術部の坂本さん放送部の深沢さん、佐藤さんが参加した。また、彩る感動 東海総体に卓球部平野さん、体操部渡邉さん、篠原さんが出場した。

11月

第39回山梨県高等学校芸術文化祭
書道部 書道部門 望月さん 優秀賞
文芸部 短歌の部 山岸さん 齊木さん 優秀賞
俳句の部 雨宮さん 小澤さん 高橋さん 優秀賞
放送部 ビデオメッセージ部門 芸術文化祭賞
オーディオピクチャー部門 奨励賞
新聞部 優秀賞
音楽部 優秀賞
吹奏楽部 優秀賞

2019の出来事

- 4月9日 - 2024年度より 発行される新紙幣の表の図柄が1万円札が渋沢栄一、5千円札が津田梅子、千円札が北里柴三郎に決定。
- 5月1日 - 天皇陛下が即位され「令和」が始まる。
- 8月4日 – ゴルフ全英女子オープンで渋野日向子が初優勝。
- 9月20日 – ラグビーW杯日本大会が開催され、日本代表がベスト16に入る。
- 10月1日 - 消費税が8%から10%へ。
- 10月9日 – リチウムイオン電池の開発により吉野彰氏がノーベル化学賞を受賞
- 10月31日 – 首里城の正殿など8棟が焼損。

流行語

ONE TEAM
計画運休
軽減税率
スマイリングシンデレラ
タピる
○○ペイ
闇営業
令和

山梨県立甲府西高等学校の記録

令和元年 WESTART

4月

本年度入学の1年次生より6クラス220名定員になった。(前年度より20名減)

5月

第71回総合体育大会が行われた。全運動部が16種目に出場し、男子10点で総合17位、女子9点で総合14位と健闘。

関東大会へは体操部、卓球部、男子バスケット部、陸上部が出場を決めた。

6月

「王西復古の大号令」のテーマの下第68回の鳳凰祭が開催される。

8月

「さが総文祭」に新聞部の宮沢さん、国語科で雨宮さん、放送部で長橋さん、囲碁将棋部の加藤さん達計8名が参加した。また、「感動は無限大 南部九州総体」に体操部の渡邉さん、体操部(新体操)の篠原さんが参加した。

国際バカロレアの説明会が1期生となる予定の中学3年生に向けて開催された。

バカロレアのプログラム説明

TOKとはどんなこと?

ワークショップを体験しよう

11月

第40回山梨県高等学校芸術文化祭

○書道部門　優秀賞　2年 穎川 桜子(山梨南中)
　　奨励賞　2年 青柳 ゆり(韮崎東中)
○吹奏楽部門　芸術文化祭賞
○合唱部門　芸術文化祭賞(10年ぶり)
○日本音楽部門　優秀賞
○将棋部門　女子の部　芸術文化祭賞　1年 藤森 あかね(甲府北西中)
○囲碁部門　女子団体戦　芸術文化祭賞　1年 加藤 万結姫(甲府西中)
　　1年 藤森 あかね
　　1年 村上 綾香(城南中)
　　女子個人戦　優秀賞　1年 加藤 万結姫
○新聞部門　優秀賞
○放送部門　朗読部門　優秀賞　2年 小山 実生(竜王北中)
　〃　ビデオメッセージ部門　奨励賞
○演劇部門　優秀賞
○文学部門　俳句の部　優秀賞　2年 荒井 日菜子(若草中)
　　短歌の部　芸術文化祭賞　3年 山本 水桜(塩山中)
　　優秀賞　3年 小林 秋桜子(鰍沢中)
　　3年 田邉 野乃実(塩山中)
　　3年 岩間 楓季(一宮中)
　　3年 高橋 佳奈(富竹中)
　　3年 鏑袋 愛弓(甲府東中)
　　俳句の部　優秀賞　3年 雨宮 知己(敷島中)
　　3年 長谷川 舞(玉幡中)

2020の出来事

- 2月27日 - 新型コロナウイルス感染拡大防止のため3月2日から春休みまで臨時休校措置がとられる。
- 3月24日 - 東京オリンピックが延期となる
- 7月3日 - JR東海が、リニア中央新幹線の27年開業が困難になったとの見解を表明。
- 10月16日 – 劇場版『鬼滅の刃』無限列車編が公開され400億円を超す大ヒットに。
- 11月12日 – 家庭用ゲーム機「PlayStation 5」(PS5)が発売

流行語

3密
聖愛の不時着
あつまれどうぶつの森
アベノマスク
アマビエ
オンライン○○
鬼滅の刃
Go To キャンペーン

山梨県立甲府西高等学校の記録

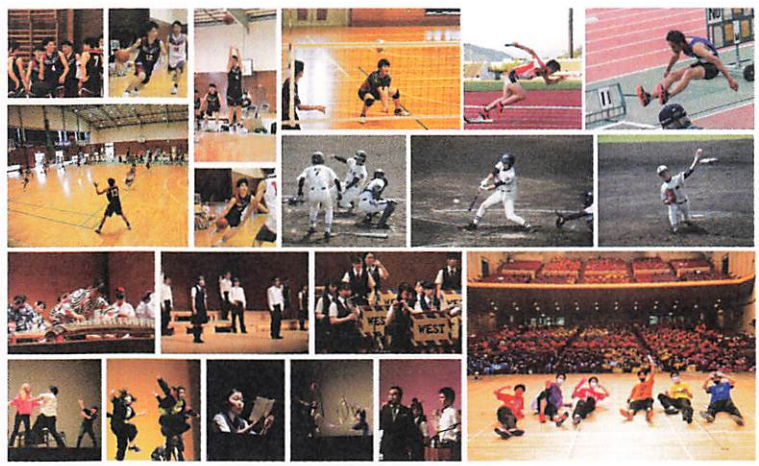
3月 新型コロナウイルスの影響で卒業式を短縮して実施、翌2日より休校となり、短期海外留学も中止された。

4月 7日に政府から緊急事態宣言が発令され、生徒のいない異例の新年度となった。

5月 総合体育大会も中止された。宣言解除を受けて、25日より分散登校が開始された。分散登校は各年次とも3クラスずつの午前午後別々の授業であり、当面土・日の行事は自粛した。それでも、校舎には生徒が戻り、学校生活が始まった。しかし前例のない事態で、行事の実施や運営は手探り状態が続いた。

6月 2日部活が段階的に再開され、グラウンドに生徒の声が戻った。8日、入学式の代わりに新入生の歓迎セレモニーを行い、新1年生を全校生徒で迎えた。また、鳳凰祭が延期され、YCC県民文化ホールで7月に文化局発表、9月に鳳凰祭を行う事となった。

7月 高校野球山梨大会が無観客で実施され、本校は2回戦対塩山10-2、3回戦対吉田7-5と勝ち上がり、ベスト8に入る。また、各部活とも独自の引退試合が開催された。男子バスケットボール部は24日に本校で3年生の引退試合を保護者を招いて実施した。



8月 「高知総文祭」はオンライン開催となり、放送部の小山さん、吹奏楽部、新聞部が参加した。

11月 第41回芸文祭が行われ、ユネスコ(弁論)部門と新聞部門で来年度の総文祭の切符を手にした。

2021の出来事

- 1月11日 - 山梨学院高校が高校サッカー日本一に
- 2月20日 - 全豪オープンで、大坂なおみ選手が2度目の優勝。
- 4月11日 - ゴルフの松山英樹がマスターズ優勝。日本男子初のメジャー制覇。
- 6月6日 – ゴルフ全米女子OPで笹生優花が初優勝。
- 6月6日 – 陸上男子100メートルで山県亮太が日本新9秒95を樹立。
- 8月8日 – 東京オリンピック開幕、日本は最多の58メダル。
- 11月18日 – 大リーグ大谷翔平がMVPに輝く

流行語

リアル二刀流 / ショータイム
うっせぇわ
親ガチャ
ゴン攻め / ビッタビタ
ジェンダー平等
人流
Z 世代
黙食

山梨県立甲府西高等学校の記録

3月 前年12月から延期されていた2年次の修学旅行が、北関東(栃木・福島方面)に2泊3日で実施。福島では東日本大震災10年目の現状や日光では東照宮など見学した。

4月 本年度入学の1年次生より5クラス200名定員になった。国際バカロレア教育を履修する1期生(2年次)の授業が始まる。

5月 総合体育大会が2年ぶり開かれ、陸上部、体操部、卓球部、山岳部が関東大会出場を決めた。

6月 第70回の鳳凰祭も2年連続コロナ禍となり、例年と大きく変更を余儀なくされながらも、開催。一般公開は無し、YCC県民文化ホールを1日半貸し切って行った、制約が多く、声を出せない中でも盛り上がることが出来た。

8月 卓球部、体操部がインターハイに出場。和歌山総文祭にユネスコの弁論部門で窪川さん、新聞部、囲碁将棋部、音楽部が参加した。放送部はNHK杯全国高校放送コンテストへテレビドキュメント部門と校内放送研究発表会の2部門で出場し、テレビドキュメント部門では準決勝まで進み政策奨励賞を受賞した。美術部は第47回UTY教育美術展で山梨県知事賞を後藤さん、山梨県教育長賞を古屋さんテレビ山梨賞を畑野さんと矢崎さんがそれぞれ受賞した。

11月 第42回山梨県高等学校芸術文化祭において、テーマ部門「止めるな芸術　止まるな私」で中田さんが最優秀賞を受賞し、本年度のテーマとなった。美術部の古屋さんが芸術文化祭賞。将棋部門男子の部で西川さんも芸術文化祭賞を受賞した。

演劇部門	優秀賞	
	創作脚本奨励賞	雨宮想明(甲府北西中)
合唱部門	優秀賞	
吹奏楽部門	優秀賞	
日本音楽部門	優秀賞	
新聞部門	優秀賞	
書道部門	優秀賞	大関悠吾(竜王北中)
茶道部門	優秀賞	森川実咲(白根巨摩中)
ユネスコ部門	奨励賞	小池和(玉穂中)
美術・工芸部門	奨励賞	雨宮想明(甲府北西中)　櫻場由梨(甲府北中)
放送部門	アナウンス部門	奥山南(梨大附属中)
将棋部門	男子の部　第3位	狩野竜馬(梨大附属中)
文学部門	詩部門	奨励賞　中本貴央(玉穂中)
	短歌部門	奨励賞　小林一慶(玉幡中)　久保田弥生(田富中)
	俳句部門	優秀賞　上田晃太朗(甲府北東中)　大森拓也(玉幡中)　常盤真央(櫛形中)
		奨励賞　秋山遥香(白根御勅使中)　車谷心彩音(梨大附属中)
		関口諸梨(若草中)　土橋沙和(櫛形中)　中村知歩(甲府北東中)
		保坂優奈(櫛形中)　松田侑大(甲府南中)　湯川大善(甲府南中)

ダヴィンチの　遠近法は　青を足す　僕らの春が　青い理由か

2022の出来事

- 2月4日 - 北京オリンピックが開催され日本は18個のメダルを獲得した。
- 4月1日 - 改正民法が施行され、成人年齢が18歳に
- 8月9日 – 大リーグ・エンゼルスの大谷翔平が104年ぶりに「2桁勝利、2桁本塁打」を達成した。
- 10月20日 – 円相場がバブル期の1990年以来、1ドル＝150円台まで下落した。
- 11月23日 – サッカーW杯で日本がドイツ・スペインを破り16強。

流行語

村神様
キーウ
きつねダンス
国葬儀
宗教2世
知らんけど
スマホショルダー
Yakult 1000

山梨県立甲府西高等学校の記録

4月

今年度もコロナ禍での「新しい生活様式」と感染拡大防止を柱として、学校生活が始まった。6クラスがある最後の年となった。

5月

第73回総合体育大会が行われ、陸上部、体操部、卓球部、水泳部が関東大会出場を決めた。

6月

第71回鳳凰祭を2日間にわたり、実施した。1日目YCC県民文化ホール、2日目西高で一般公開はせず、各生徒1名の保護者を時間を分けて来校していただいた。2年ぶりに模擬店を出店したが、飲食が難しいので、射的やインスタ映えスポット等各クラス工夫を凝らしたものとなった。

7月

n-Quest ～探究活動～

7月8日(金)YCC県民文化ホールで課題論文発表会「第1回 n-Quest 西高探究の日」が行われました。
生徒たちは、自分自身が関心を持った課題に対して批判的な視点をもって自ら学び探究することにより、真理を求め自分の力で主体的に生きていく姿勢を身に着けることができるよう、課題論文に取り組んできました。その集大成として、3年次生代表者10名が発表会を行いました。

8月

インターハイが愛媛県で行われ、卓球部の平野さんが参加した。「東京都総文祭」に音楽部、新聞部、美術部の古屋、将棋部の西川さん、書道部の大関さんが参加した。美術部はUTY教育美術展で加賀美さんが文部科学大臣賞を受賞し、テレビ山梨賞に古屋さん、佳作に饗場さん、渕上さんが入賞した。

11月

第43回山梨県芸術文化祭にて、文学部門短歌部門で志村さん、合唱部門で音楽部、美術工芸部門で加賀美さんがそれぞれ芸術文化祭賞を受賞し、翌年の総文祭に参加を決めた。

芸術文化祭賞 合唱部門

芸術文化祭賞 美術工芸部門

2023の出来事

- 3月21日 - ワールド・ベースボール・クラシックで日本が3度目の優勝を果たした。
- 5月8日 - 新型コロナウイルス感染症の感染症法上の分類が8日、季節性インフルエンザと同じ「5類」に引き下げられた。
- 9月1日 - 気象庁は、今年の夏(6〜8月)の平均気温が、1898年の統計開始以降で最も高かったと発表した。
- 10月11日 - 将棋の王座戦五番勝負で、藤井聡太竜王が3勝1敗でタイトルを奪取し、史上初の八冠独占を成し遂げた。

流行語

アレ（A.R.E.）
新しい学校のリーダーズ
OSO18
蛙化現象
生成AI
地球沸騰化
ペッパーミル・パフォーマンス
観る将

山梨県立甲府西高等学校の記録

4月 本年度より全年次5クラスになった。

5月 第74回総合体育大会が行われ、小瀬で4年ぶりにテント村が復活した。陸上部、体操部、男子ソフトテニス部、水泳部が関東大会出場を決めた。

6月 第72回鳳凰祭が4年ぶりに入場制限なしで開催(2日目)。約1200名を超える来校者で、賑わいを取り戻した。

7月 体操女子がインターハイに参加。かごしま総文祭に美術部の加賀美さん、文芸部の志村さん、新聞部の田中さん佐藤さん秋山さん小池さん岡田さん、将棋部の近藤さん田中さん長谷部さん、書道部の小野さんが参加した。

体操競技(体操部)
松住祐里　小野織
塩澤彩華　横内瑞子

美術・工芸部門(美術部)
総合開会式出演
加賀美葵

文芸部門(短歌)
志村晃太郎

新聞部門(新聞部)
田中碧都　佐藤李樹
秋山翔弥　小池風花
岡田真歩

将棋部門(囲碁将棋部)
近藤俊太　田中康太
長谷部龍範

書道部門(書道部)
小野和奏

10月 5日、120周年記念式典・記念講演会がYCC県民文化ホールで開催された。21日本校ダンス部が東京ガールズコレクションのFES YAMANASHI 2023にバックダンサーとして出演。

11月 山梨県高等学校芸術文化祭において、鳳凰学の坂本さん岡田さん清水さんが社会科学部門で、囲碁将棋部の男子団体・男子個人佐藤さん、美術部森田さん、書道部神野さんがテーマ揮毫部門芸術文化祭賞を受賞した。また、演劇部、茶道部、箏曲部、小説部門、詩部門で樋口さん、短歌部門、俳句部門で多数名、写真部小林さん、芸文祭テーマ部門で飯島さんが優秀賞に選ばれ、関東大会へ出場する生徒も多数入賞した。

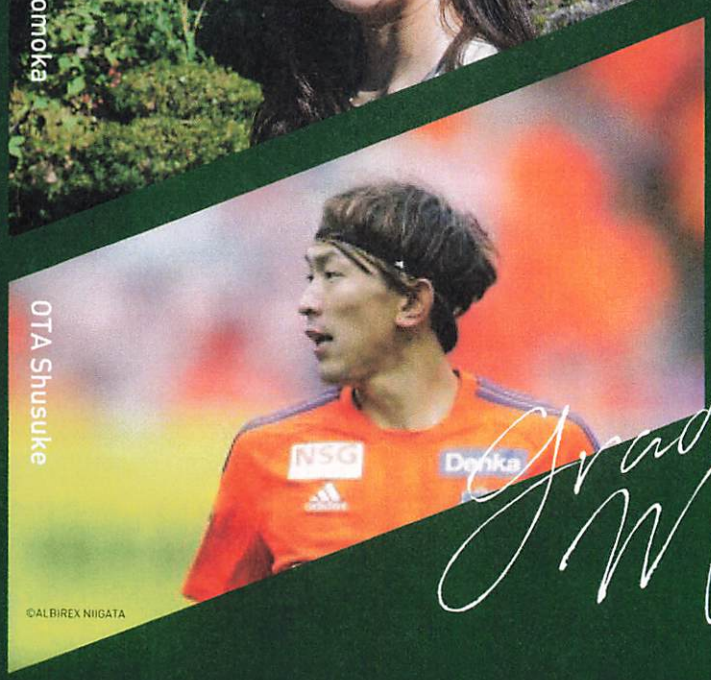
第13回科学の甲子園山梨大会にて、甲府西高Aチーム(太田さん、廣瀬さん、神野さん、長沼さん、新津さん、上原さん、武田さん、宮田さん)が総合競技部門1位となり、決勝戦に進み、総合で第4位となった。

各界で活躍されている卒業生から

NAGAI Manabu

ANAMIZU Kosuke

FURUYA Momoka



OTA Shusuke

©ALBIREX NIIGATA

Graduate Message

参議院議員

永井 学

NAGAI Manabu

高45回生
1974年5月7日生まれ。
國學院大學法学部卒。株式会社エフエム富士、衆議院議員秘書などを経て、2011年山梨県議会議員。以後3期連続当選。2022年参議院議員に初当選。

世の幸と国の栄えに尽くさなん高い理想をもって

「世の幸と国の栄えに尽くさなん高き理想よ」1993年3月の卒業式、最後の校歌を斉唱しながら、このフレーズ噛みしめ「いつか人の役にたつ仕事がしたい。」と考えていました。私の政治の原点は、間違いなく甲府西高で過ごした3年間にあります。

高校に入学して、すぐに生徒会副会長になりました。そして、高校2年の時には生徒会長を拝命。この時は数年ぶりに生徒会長選挙が行われ、なんとか当選。「誰かに想いを託され、それを形にしていく」とてもやり甲斐のある仕事でした。原付バイク免許取得の件や、アルバイトの件など生徒総会では異例の長時間審議をしたことも今となっては良い思い出です。当時の生徒会のメンバーが親身になって、そんな私を支えてくれました。決して一人では為し得なかったことばかりです。仲間の大切さ、想いを形にするということの尊さを、甲府西高で勉強させて頂きました。

大学に進み法律を勉強する傍ら、当時、衆議院議員だった横内正明先生の事務所でアルバイトする機会を得ます。いつかは自分もこんなところで「世の幸と国の栄え」のために働いてみたい。と思っていました。大学卒業後、ラジオ局、政治家の秘書などを経験して、山梨県議会議員へ。そして遂に2022年7月参議院議員に初当選させていただきました。当選は入り口であり、まだ道半ばではありますが、胸に「志」を持ち続け、高校時代に描いた夢を叶えることができた自分は本当に幸せ者だと思っています。

後輩の皆さんへ。今は人に笑われるような夢でも想い続けてください。想い続けなければ夢は叶いません。例えそこに至らなくても、諦めず前に進んできた時間はきっと皆さんのこれからを助ける大きな力となります。私も皆さんに負けないよう、これからも「世の幸と国の栄え」のため、国のど真ん中で精一杯働いてまいります。甲府西高で過ごしたあの時間を胸に。

生徒会役員で1枚

サウンドデザイナー

穴水 康祐

ANAMIZU Kosuke

高50回生
1979年8月28日生まれ。
2020年に携わった東京造形大学のBRAND CONCEPT MOVIEは世界三大デザイン賞のひとつレッド・ドット・デザイン賞2022を受賞。現在は、映像や映画のための楽曲制作、アート作品や空間のためのサウンドデザイナーとして活動している。

楽な方より楽しい方へ

日々勉学に勤しんだ我が母校から、こういったお話をいただけるなんて光栄です！と引き受けてしまったけれども、いざ締め切り直前に慌てて書き始めてみたものの、全くまとまらない。自分の気持ちをかっこよくドン！と表明したいが、言葉にした途端に肝心なことがこぼれ落ちて、心の中にあった状態から解像度が下がってしまう。自分のテクニック不足ともいえるが言葉のプロじゃないし頑張りたくない。だけどかっこいいことが言いたくなっちゃうという自分のタチの悪さに苦しめられている。「で、何が言いたいの？」という話だが、文字数を稼ぐために遠回りをしてしまいました、ごめんなさい。

なんとかある程度文字数を稼げたところで、だから音楽に夢中になっているのかなぁと思った。曖昧でボンヤリとしているけれども、はっきりくっきりとある〝何か〟を取り扱えるというか、曖昧のままで良いというか、「曖昧にしておくことにこそ意味があるんだぜ」みたいな良い加減な感じ、言葉にできない・したくないこと、理屈が入ってこられない領域こそが主戦場みたいなところが、自分には居心地が良いんだろうなぁと思う。正解も不正解も、基本的にはないところにも惹かれている。教養があろうがなかろうが、音痴であろうがなかろうが、それは其々の性質の話であって、音痴だからこそ活きる音楽もあるし、磨き上げた技術があるからこそ輝く音楽もあるし、そもそも聴く人の心の状態で聴こえ方は変わってしまう。これが正解です！なんてものはなく、それが難しいところでもあるのだが、だからこそ楽しい。学校はある意味で正しさを教える所だと思うが、時代や状況や境遇で移ろってしまう正しさよりも、もっと色んな楽しさを伝授してくれる所になったら良いなぁと、正しさよりも楽しさを選んだものの未だにフワフワと生きながらえている人間がそう思ったところで、目標文字数達成。楽な道より楽しい道を選んで生きていきたい。ご清聴ありがとうございました！

「当時の気の合う仲間と」
～部活や音楽、自分の好きなことに夢中でした～

文部科学省高等教育局私学部
私学行政課専門官

古屋 桃香

FURUYA Momoka

高61回生
平成3年3月生まれの33歳。甲州市立塩山中でハンドボールに打ち込んだ後、医学部を目指すために甲府西高に進学。数学が大の苦手で医学部は断念。高校卒業後は、お茶の水女子大学、同大学院に進学し、心理学を専攻。大学院博士前期課程を修了後、平成27年4月に文部科学省に入省。現在は文部科学省高等教育局私学部私学行政課において、私立学校法の改正をはじめ、学校法人の組織・管理運営に関する政策立案に従事。一番好きな果物は桃。

西高から自分の目指す世界へ

皆さんこんにちは。平成20年度卒業生の古屋桃香と申します。このたび、甲府西高校が創立120年を迎えたとのこと、大変おめでとうございます。貴重な機会を頂戴しまして、誠にありがとうございます。

私は、甲州市塩山に生まれ育ち、ネクタイの制服と電車通学に憧れ、片道40分をかけて西高に通いました。西高では、切磋琢磨できる仲間や自分の本気と向き合ってくれる素敵な先生との出会いに恵まれ、勉強に部活に、全力投球の3年間を過ごすことができました。

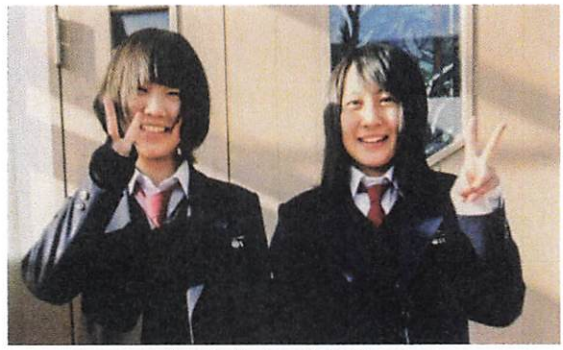
西高時代の私は、とにかく希望の大学に「入る」ことを目標に、毎日の授業や課題に取り組み、模試の結果に一喜一憂していたのですが、今となっては「何をそんなに気にしていたのだろう?」と思います。大学は、一つの通過点。「入る」ことがゴールではありません。今、西高で学んでいる皆さんには、この先の人生で何を学んで、どんな人になりたいか、何をして生きていきたいか、それをとことん考えて過ごしてもらいたいと思います。

私は、「子どもたちが生きていく社会が、今よりいいものであってほしい。生まれてよかったなと思える社会であってほしい。」と強く思ったことをきっかけに、文部科学省の門をたたきました。入省してから今に至るまで、その志は変わっていません。

学習指導要領の前文に、こんな一文があります。

これからの学校には、こうした教育の目的及び目標の達成を目指しつつ、一人ひとりの児童・生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められる。

私は、この一文を読むたびに、泣きたくなるような、それでいて気合が入るような、不思議な気持ちになります。これは、未来を担う皆さんへの切実な願いです。西高から、自分の目指す世界へ、どうか力強く羽ばたいてください。陰ながら応援しています。



妹の入学式の朝自宅にて
2人一緒に電車で通学することも多くありました

高校入学時に両親からのプレゼント
大学受験もこの時計とともに乗り切りました

プロサッカー選手

太田 修介

OTA Shusuke

高66回生
1996年2月23日生まれ。
職業：プロサッカー選手
池田小学校→甲府西中学校→甲府西高校→日本体育大学→ヴァンフォーレ甲府→FC町田ゼルビア→アルビレックス新潟

思い出

甲府西高等学校、120周年おめでとうございます。卒業して10年が経った今、西高で過ごした日々を思い返す機会を与えて頂き感謝しています。

私は西高に通いながらヴァンフォーレ甲府のユースチームでサッカーをしていました。当時の私の生活は、学校が終わるとすぐに帰宅し、自転車で30分かけて練習場にいき、練習後に家に着くのは22時頃。それからご飯を食べ、お風呂に入り、学校の課題をやる。土日は試合、県外に遠征することも多くありました。一見、大変そうに見えるこの生活ですが、当時私は全くもって苦に思っていませんでした。なぜなら、絶対にプロサッカー選手になりたかったからです。そして、そんな私を肯定し、応援してくれた先生方が西高には沢山いてくれたことも理由の一つでした。私の体調を気遣ってくれたり、試合の結果を気にしてくれていました。また、県内で行われる試合だけでなく、県外の試合にもわざわざ応援に駆け付けてくれたこともありました。校外の活動に対してもこれだけ応援してくれていたので、校内の部活に入っていなくても孤独を感じる事がなく、私は私で認めてもらえているという安心感があり、より一層頑張ることができていました。

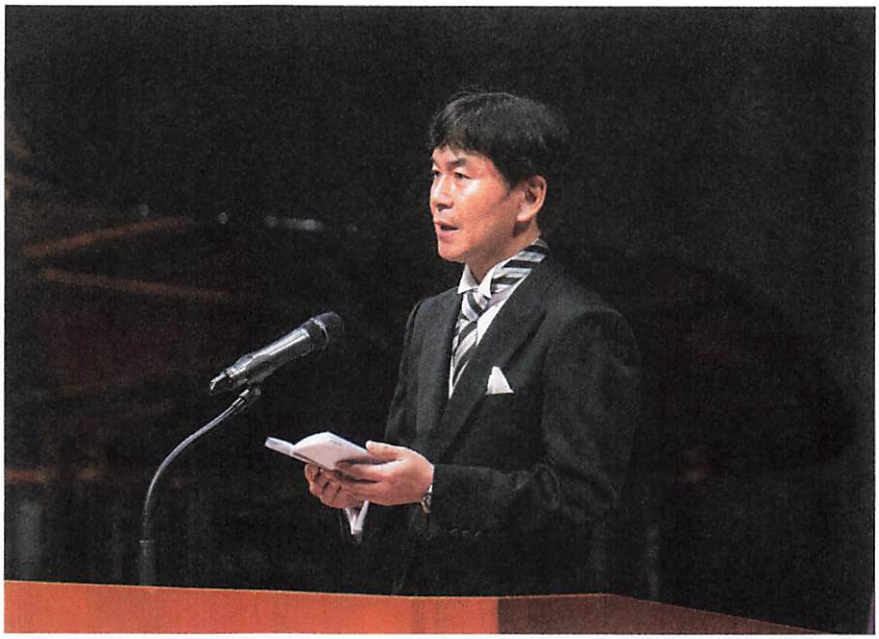
結果的に高校卒業後にプロになることは出来ずに日本体育大学に進学することになりましたが、その際もサッカー推薦により8月に合格するという当時の西高では、あまり前例のない事例にも関わらず、先生方は喜び応援してくれました。大学卒業後、プロサッカー選手になることができたのですが、卒業して10年経つ今でも、試合の結果を追い、応援してくれていて連絡をくださる先生もいます。先生と生徒という域を越えてサポートしてくれる先生方がいたからこそ、今の自分があると思っています。

今はJ1リーグでプレーしていますが、更に飛躍してお世話になったこの西高をさらに輝かせるために日々努力を重ねていきたいと思っています。

創立120周年記念式典

令和5年10月5日(木)にYCC県民文化ホール大ホールにおいて、創立120周年記念式典が挙行されました。

記念式典は厳粛な雰囲気の中、来賓の皆様による祝辞、また、長年にわたり本校の発展に貢献された方々への感謝状の贈呈などが執り行われました。コロナ禍で歌うことのできなかった校歌も会場に響き渡りました。



式辞

開会宣言

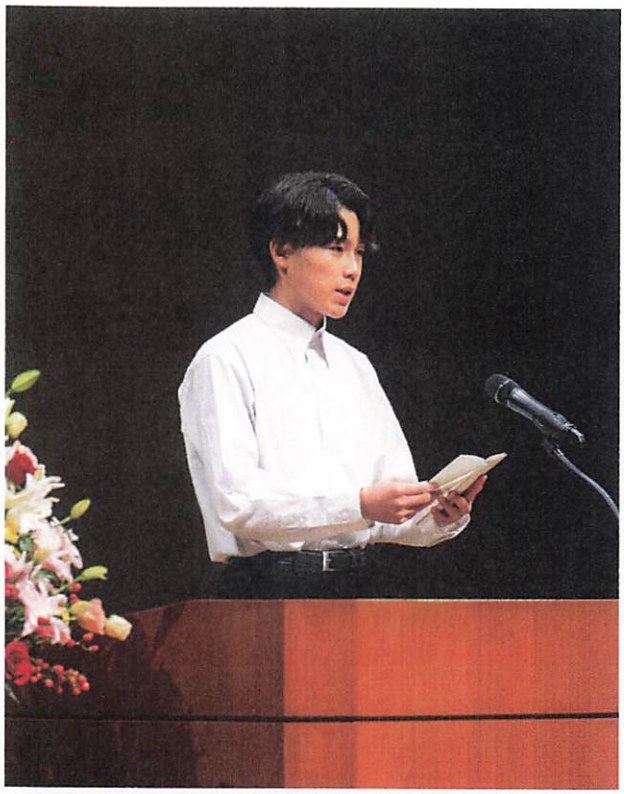
同窓会長

PTA会長

来賓・祝辞

教育振興会長

来賓・祝辞



生徒会長

感謝状贈呈

施設・設備環境の充実

エアコン

令和2年3月に新型コロナ感染症が流行。感染の状況は全国に広まり、感染予防の観点から生徒が密になることを避けるため、オンライン授業やクラスを2つに分けての授業や分散登校を余儀なくされました。教室数の確保や夏の暑い時期も重なり、快適な学習環境の提供を兼ねて、選択教室3室と化学実験室にエアコンを設置しました。

また令和5年には、地球温暖化が進み、地球沸騰化がいわれる中、熱中症予防なども兼ね書道室にも設置しました。

自習室（ラーニングスペース）

生徒の自主的な学習のため既設の自習室が設置してありますが、南館のみであることや人数など制約もあり十分な学習環境が提供できていませんでした。そこで新たに北館にも自習室を設置しました。自習室の学習環境も従来のような個人の学習ブースでなく、オープンスペースとし、協働的な学習など多様な学習ができるよう移動式の机・椅子を設置しました。また壁や床は生徒のデザインにより張り替え、快適な環境で学習に集中できる施設です。

平日ばかりでなく、土曜日・日曜日も多くの生徒が利用しています。

清掃ポリッシャー

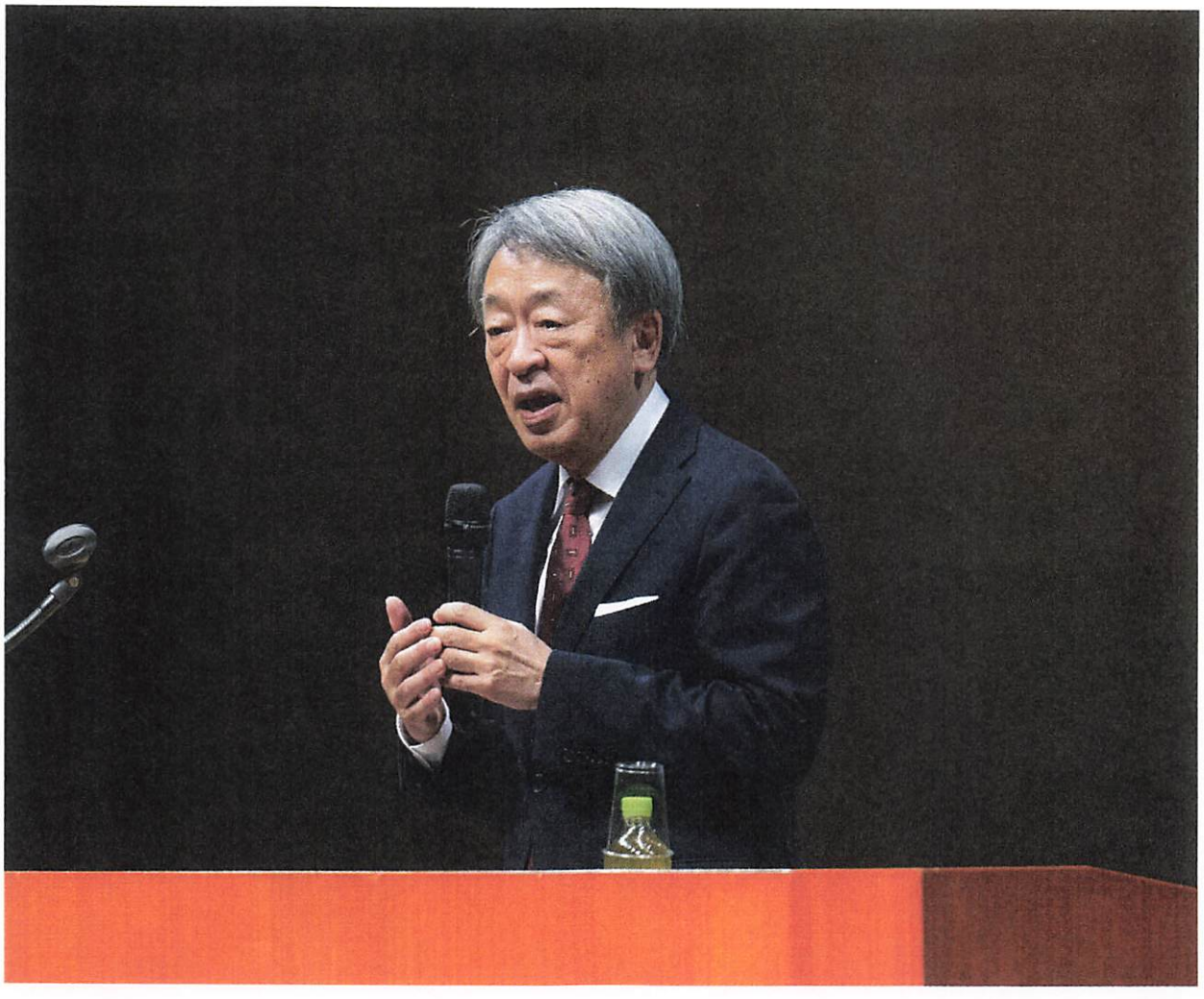
本校では、普段の清掃でも床に雑巾がけをするなど日頃から清掃活動には力を入れてよい生活環境の構築に取り組んでいます。より一層の充実および衛生対策のため清掃ポリッシャーを8機導入しました。

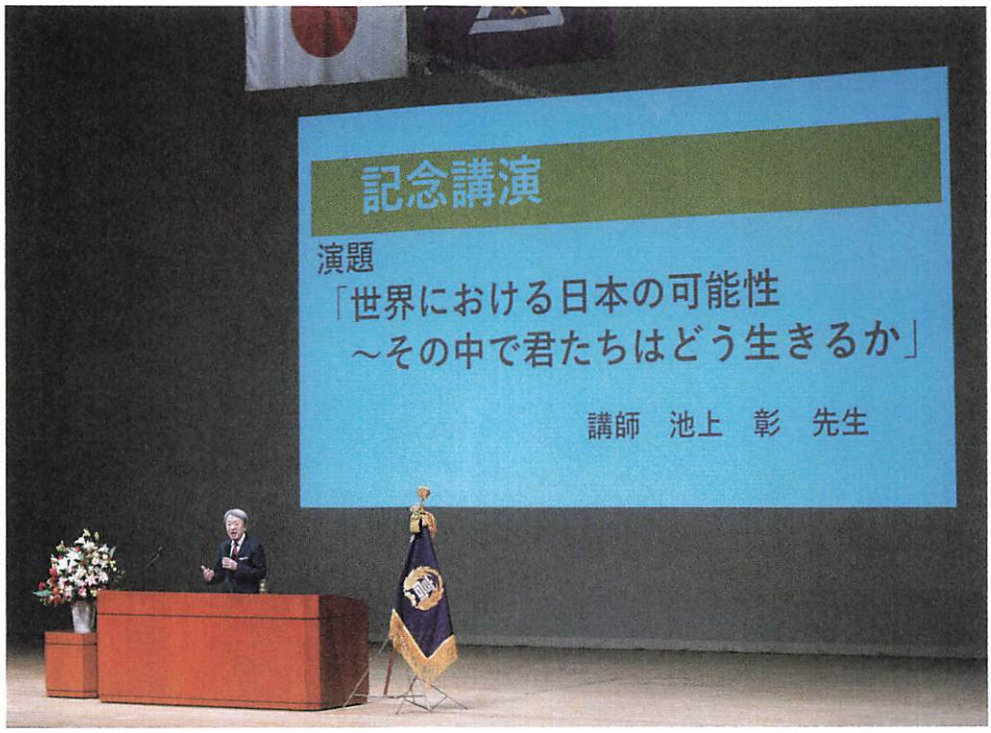
創立120周年記念講演会

令和5年10月5日（木）にYCC県民文化ホール大ホールにおいて、創立120周年記念講演会が行われました。

ジャーナリストとして活躍されている池上彰氏を講師としてお迎えし、「世界における日本の可能性～その中で君たちはどう生きるか」と題して講演をいただきました。

数多くの実体験を含む貴重なお話に、来賓の方々、同窓会員および生徒・保護者が引き込まれ、あっという間の80分でした。その後の質疑応答でも、多くの生徒から活発な質問が出て、大変有意義な講演会となりました。




記念講演
演題
「世界における日本の可能性
～その中で君たちはどう生きるか」
講師　池上　彰　先生

創立120周年記念式典会場にて（令和5年10月5日）

協力者一覧（敬称略、順不同）

寄稿者

古澤 夏喜　坂本 悦子　羽田 喜久枝　斉木 邦彦　永井 学　穴水 康祐　古屋 桃香
太田 修介　二木 嶺多　山本 航世

座談会参加者

小林 美佐代　石原 敬彦　手島 俊樹　高見澤 圭一　長谷川 拓　清水 美保子　姫野 爽士

資料提供・協力者等

ササモトスタジオ　サンニチ印刷

編集委員

後藤 詠一　平井 茂樹　平本 圭子　名取 美和子　柏木 洋和　横内 裕三　依田 裕子
向山 直貴　細野 ゆかり　渡邊 裕大　池田 裕子　保坂 昂祐　石井 久美

編集後記

甲府西高等学校創立１２０周年の記念事業の一環として記念誌を作成し、ここに発刊する運びとなりました。前回の１１０周年記念誌を参考に、今回は本校の情報誌「n・stage」と共に最近の10年の歩みを振り返ることになりました。直近の3年間は新型コロナウイルス感染症の蔓延に伴い、様々な行事が縮小あるいは中止となっていたため、記事の材料集めに苦労いたしましたが、編集作業を通して、甲府西高等学校としての１２０年という歴史の中で、その存在と歴史の重みを強く感じました。とりわけ同窓生の方々の多方面にわたる活躍や母校に寄せる愛着・期待は並大抵のものではないことに感銘を受けると同時に、この西高のさらなる発展のための責任の大きさも痛感いたしました。記念誌の内容は座談会、寄稿文、各方面の成績や校内の設備等の写真等を追加させていただきました。

終わりになりますが、発刊につきましてはお忙しい中、原稿を執筆していただきました方々をはじめ同窓会やサンニチ印刷の町田様、周りの先生方に多大なるご協力をいただきました。心より御礼申し上げます。不慣れで力不足のためご期待にこたえられるようなものではないかもしれませんが、ほんのわずかでも本誌が皆様の心に残るものとなることを願い、編集後記とさせていただきます。

令和6年3月　編集委員　秋山 すみ江

発行日　令和6年3月1日
発行者　山梨県立甲府西高等学校創立１２０周年記念事業実行委員会
編　集　創立１２０周年記念誌編集委員会
印　刷　株式会社サンニチ印刷

山梨県立甲府西高等学校
創立120周年記念誌編集委員会